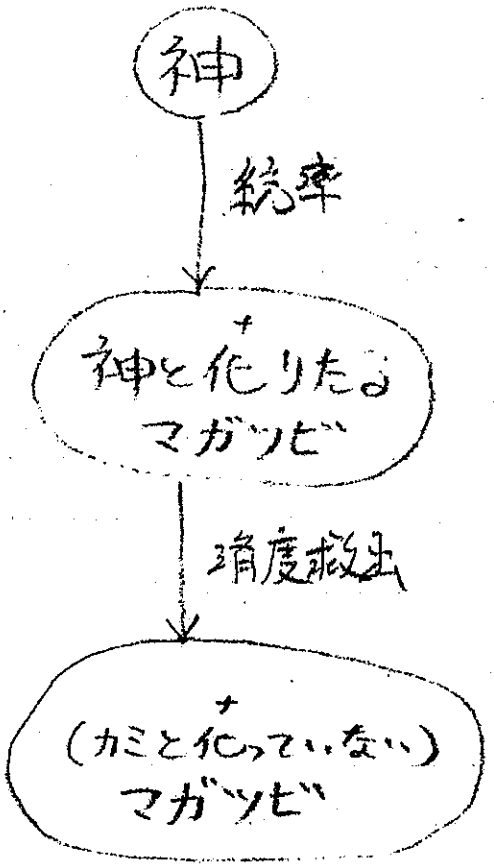
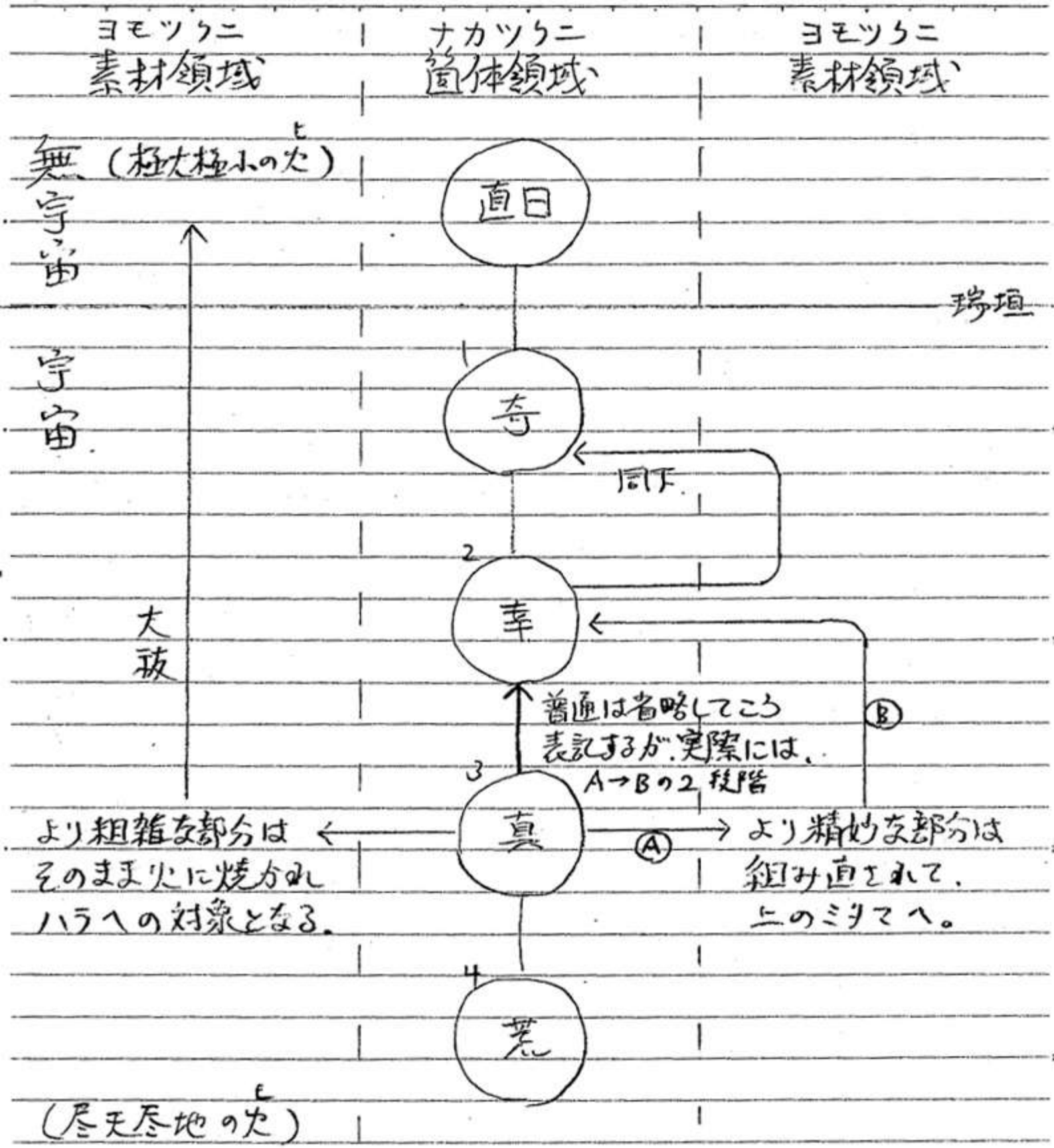


カミ　(人間界では、直日)

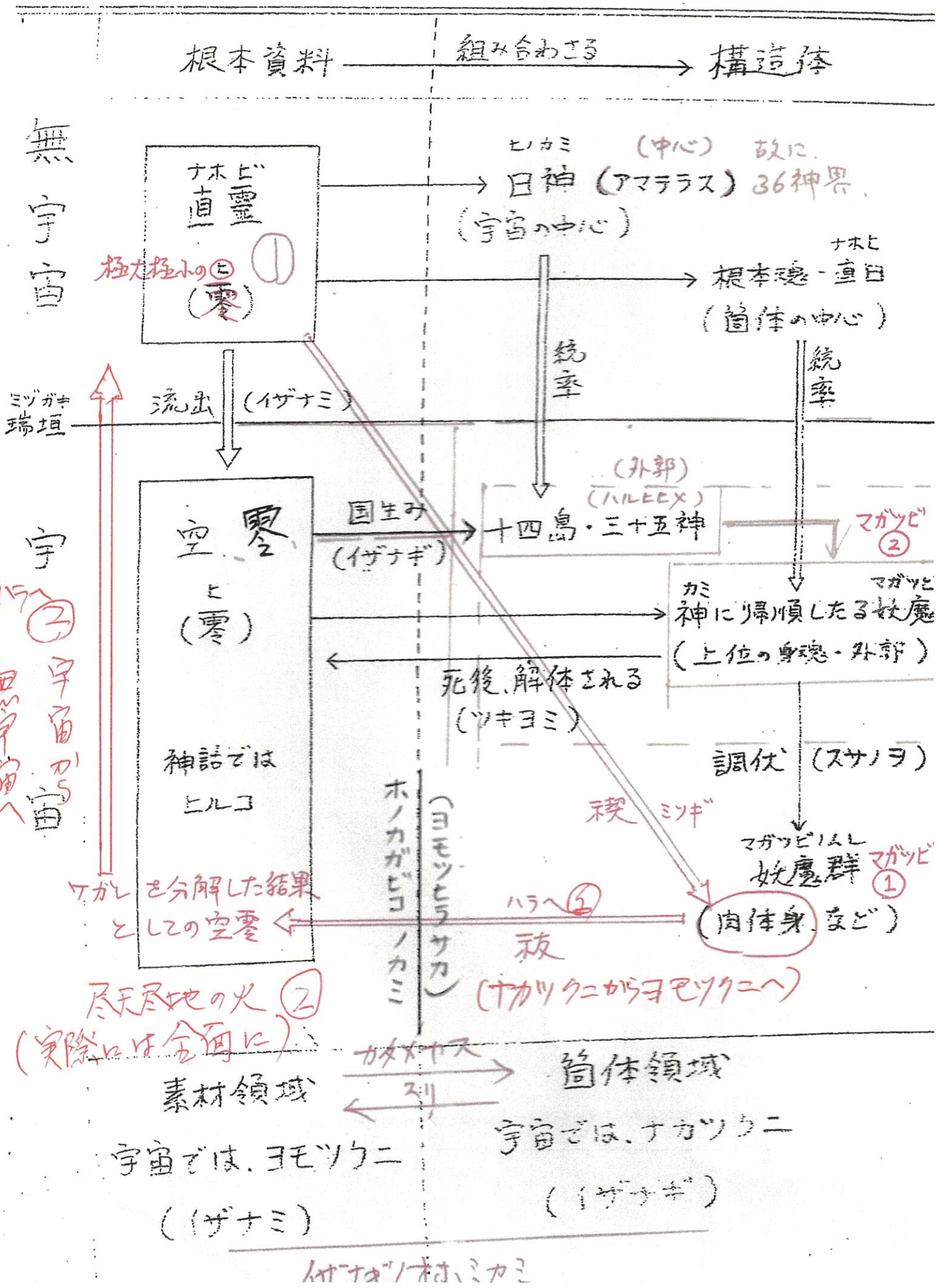
ハルとしメ (シコメ) 35.
(マガツビを調伏するためには、自分もまた
マガツビの様相を呈さざるを得ない)
(幸魂・奇魂)

ヨモツシコメ (妖魔群)　マガツビノムレ
人間界で言えば、肉体界と霊界　コミタマ

2020.2.18.(火)


ヨモツクニ
素材領域
ナカツクニ
個体領域
ヨモツクニ
素材領域
無(極大極小の火)
宇宙
宇宙
瑞垣
直日
1
奇
同下
2
幸
大祓
普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階
B
3
真
A
より粗雑な部分は
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。
より精妙な部分は
組み直されて、
上のミタマへ。
4
荒
(尽天尽地の火)

修現因子の機能図　直霊と空零



る。

九 棄てた。ウツはスツの古言。

一〇 どこの淡島か明らかでない。

一一 例は類、即ちなかまの意。子のなかまには入れなかった。淡島を子のなかまに入れなかったのは、淡き島（たよりない島）の意があるからである。

一二 やはり。

一三 天つ神は別天神五柱。御所はいらっしゃる所の意であるが、ここでは直接言うことを避けてつけた語。

一四 御言葉を求めた。御意見を求めた。

一五 御言葉で。下の「詔りたまひしく」にかかる。

一六 書紀の一書には「時天神以二太占一而卜合之、乃教曰」とあって「太占、此云二布刀磨爾一。」の訓注がある。天の石屋戸の段に鹿の肩の骨を朱桜の皮で焼いて占なう方法が記されているが、これが太占であろう。

一七 卜占によって判断して。天つ神が占なったのである。前項書紀の一書参照。

一八 御結婚をなさって。

一九 淡路島を人体化したもの。「別」は地方に別け封ぜられた者の意。「穂之狭」は「穂の早」の意か。

二〇 四国のこと。「二名」の意は未詳。

二一 体が一つで顔が四つある意で、一島四国を人体化した表現。四国がそれぞれ男女に配されている。

二二 りっぱな女の意、愛媛県の名はこれから来ている。

二三 飯に関する名であろう。比古は男の意。

3 大八島国の生成

を以ゐよ。爲む。」とのりたまひき。如此期りて、乃ち「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ。」と詔りたまひ、約り竟へて廻る時、伊邪那美命、先に「阿那邇夜志愛上袁登古袁。此の十字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。」と言ひ、後に伊邪那岐命、「阿那邇夜志愛上袁登賣袁。」と言ひ、各言ひ竟へし後、其の妹に告曰げたまひしく、「女人先に言へるは良からず。」とつげたまひき。然れども久美度邇此の四字は音を以ゐよ。興して生める子は、水蛭子。此の子は葦船に入れて流し去てき。次に淡島を生みき。是も亦、子の例には入れざりき。

是に二柱の神、議りて云ひけらく、「今吾が生める子良からず。猶天つ神の御所に白すべし。」といひて、即ち共に参上りて、天つ神の命を請ひき。爾に天つ神の命以ちて、布斗麻邇爾上此の五字は音を以ゐよ。卜相ひて、詔りたまひしく、「女先に言へるに因りて良からず。亦還り降りて改め言へ。」とのりたまひき。故爾に反り降りて、更に其の天の御柱を先の如く往き廻りき。是に伊邪那岐命、先に「阿那邇夜志愛袁登賣袁。」と言ひ、後に妹伊邪那美命、「阿那邇夜志愛袁登古袁。」と言ひき。如此言ひ竟へて御合して、生める子は、淡道之穂之狭別島。別を訓みてワケと云ふ。下は此れに效へ。次に伊豫之二名島を生みき。此の島は、身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故、伊豫國は愛上比賣此の三字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。と謂ひ、讃岐國は飯

此の詔は、正誠正義であれば正位正業を得て、山河大地も一圓光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火」で「日」で「光」であることを教へて居る。

正誠正義にして神國を築くのが日神事で、之れを成さしむるは直霊の妙用である。

直霊の妙用と云ふのは「ヒ」なる霊が、直日の統率のままに妖魔群団身と成り、妖魔軍として妖魔を調伏済度救出するの意で、妖魔なる禍津毘が直く正しく妙用を現ずる神と化り神の神業を以て太平嘉悦の楽土を築成するの義である。

神に帰順した禍津毘の活用だと云ふに等しいので、大禍津日とも称へて、神ならざるの神である。古事記に「別天神」と記したのは、此の意味であって神魔同凡に在るのである。

神と魔が同凡に在るのは神ではなくて神人であるから尊と称へて、独神とも隠身とも萠騰之物とも天神諸命とも神聖とも純男とも人とも独化之神とも俱生之神とも一神とも別神とも天祖とも祖神とも二柱神とも傳へたところの命（みこと）で天命（いのち）で大道（みち）であります。之れを祖神垂示の大道と呼ぶことが出来る。

教本 2-1-6.「直霊(ナホビ)と空霊」の付図.

No.

Date

ナホビの妙用

~~(4/10)~~

主体	別天神、神なるざるの神、神魔同凡のカミ。 (別名、大禍津日(オホマガツヒ))
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊(ナホビ)の妙用、マガツヒ(神に帰順した禍津毘(マガツビ))の活用。
	「霊(ヒ)」なる霊
第一段階	1. これが、直日(ナホビ)(中心)の統率のままに〜と成る。(ニギミタマ)
↓	
	妖魔群団身(ウシミタマ サキミタマ)(中心の統率に従っているのだから、これは「神に帰順したマガツビ」である。)
第二段階	2. これが、妖魔軍として(妖魔のままに)〜を調伏済度救出する。
↓	
	他の妖魔(まだ神に帰順していない、マガツビ) マミタマ アラミタマ
→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の楽土(神国)が築成される。

多田左雄三「日本民族の信仰」より抜粋

日本民族が日本語としての神言靈を忘れ佛教が傳ふるところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈を云ふ者はあっても全全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と称するものの皆然るところで為に却って甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

ふるべゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由良止袁布留込の七音を加へて布留邊由良

由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音と化るので阿三忙銀佛二吽吽尾覲南の音は禍言であって阿三忙銀佛二吽吽尾覲南吽怛羅二吒悍漫の音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの秘言靈で神直靈の神言である。

布留邊由良由良止袁布留辺
ふるべゆらゆらとをふるべ。
叙部斗茂茂由良
ぬなとももゆら。

淺間山人こそ仰げ眞賢木の緑色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命である天命である。之れを使用するは直日であり神直日であり直、靈であり神直靈であり神日本磐余比古である。之れを阿知米阿知米於於於と教へられてある。

NO.

DATE

4.
故に、「ふるべゆら、ゆらことふるべ、ぬなとももゆら」は、
全体として「マガツビを救出し、これを無宇宙の零(ヒ)にまで
分解して、次の何らかの資材とする」ためのコトダマとなる。

3.
「宇宙化育の秘神業(ヒメカミワザ)」を表現したコトダマが
(スリとカタメナス)　　「ぬなとももゆら」

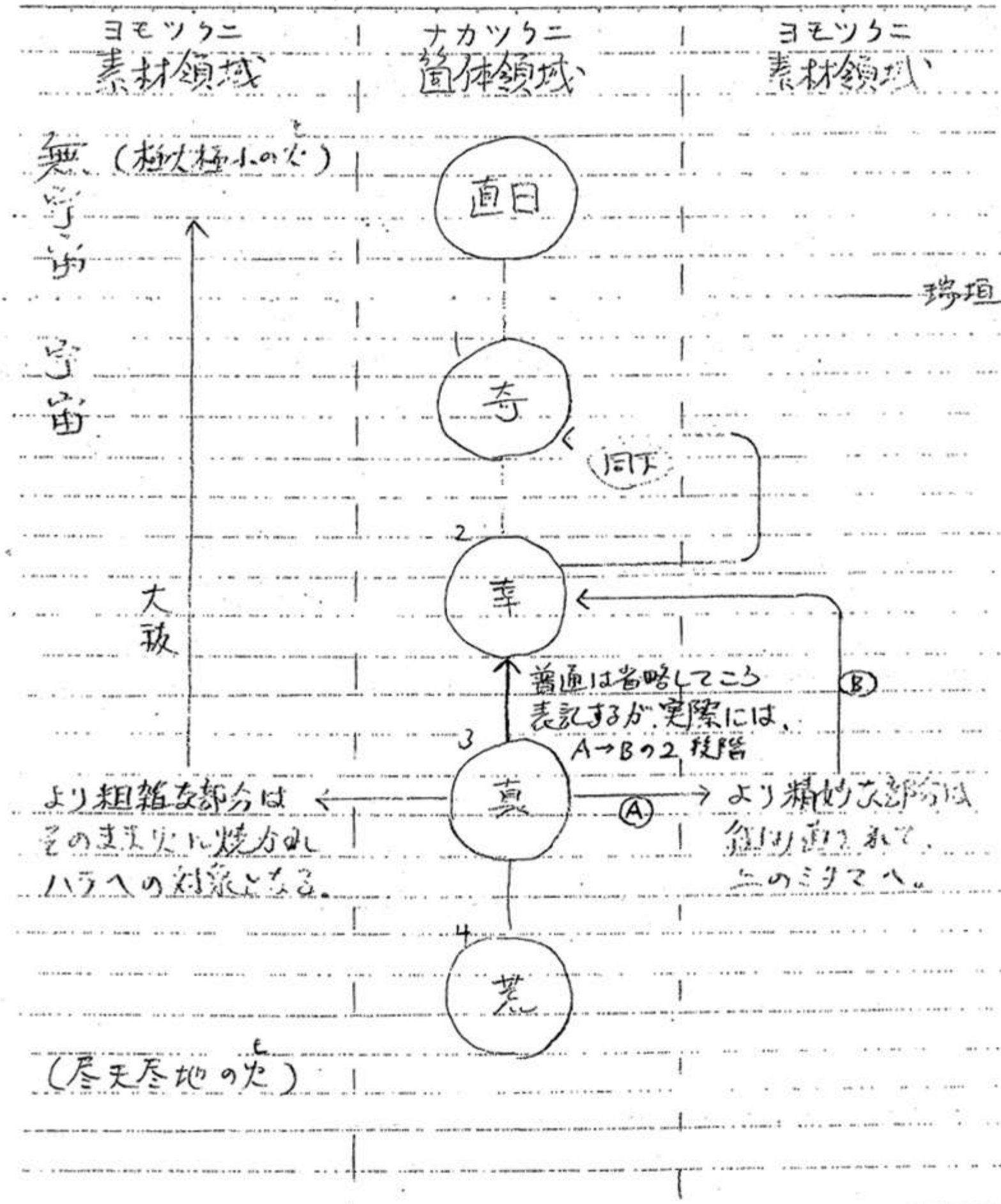
2.
このマガツビを、
調伏済度救出する
神言(カミノコトバ)

「ふるべゆら
ゆらことふるべ」

1.
禍津毘(マガツビ)の禍言(マガゴト) ——「ふるべゆら」—— マガツビそれ自体を
指す用語か?

KOKUYO

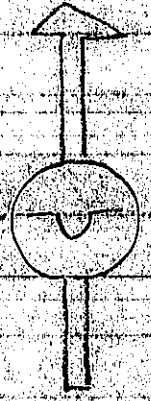
2020.2.18.(火)


ヨモツクニ
素材領域
ナカツクニ
肉体領域
ヨモツクニ
素材領域
無(極大極小の点)
宇宙的
宇宙
直日
瑞垣
1
奇
同下
2
幸
大抜
普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階
B
3
真
A
より粗雑な部分は
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。
より精妙な部分は
魂切れて、
二のミタマへ。
4
荒
(尽天尽地の点)

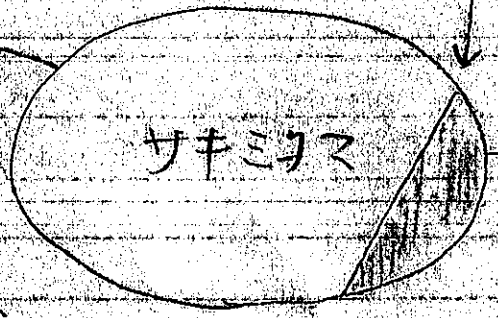
『死後、解体される』（ツキヨミ）、の説明

ヒスミノミヤで粗から精へと
組み直す際にも
あまりに粗雑な部分は
組み直しようが無いので、
切り捨てざるを得ない。

タマガキ　ヒスミノミヤ
玉垣の日隠宮



(矢)



中心に正しく帰順した部分は、
「神と化りたるマガツビ」
なので、
切り捨てられることなく、
日隠宮で組み直されて、
ウシミタマの一部と化す。

この、切り捨てられた部分が
ツキヨミノミコトの許へ。

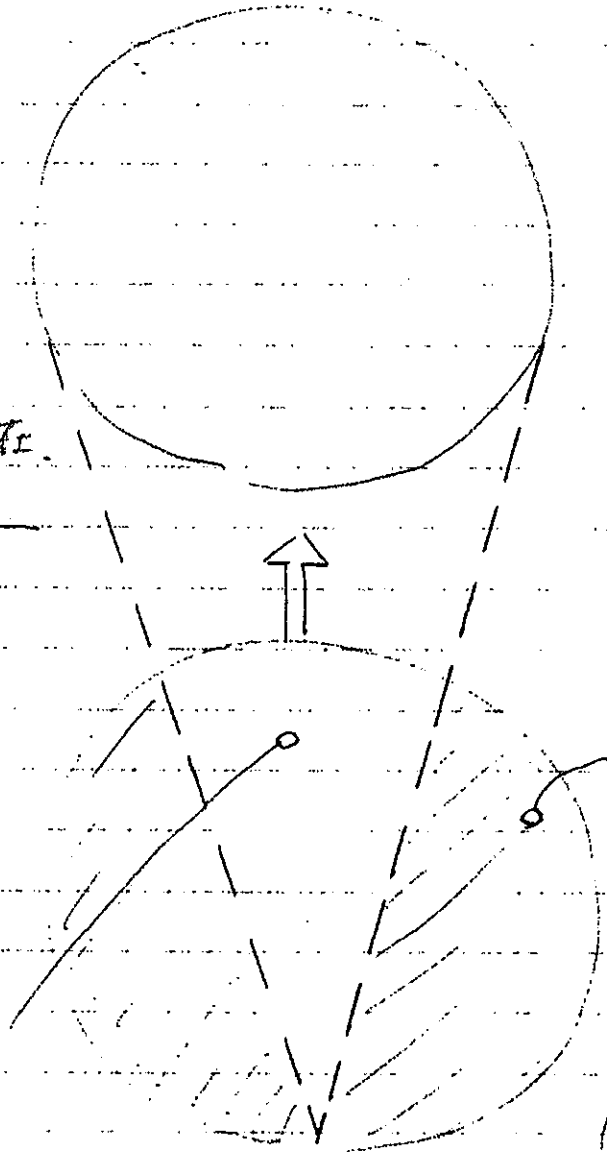
帰順しないならば
マガツビ

（2020.2.18 の図中、
「同下」の解説でもある。）

1/29

幸魂
(第三魂)
└相対的に
永遠の存在

―― 中垣 ――

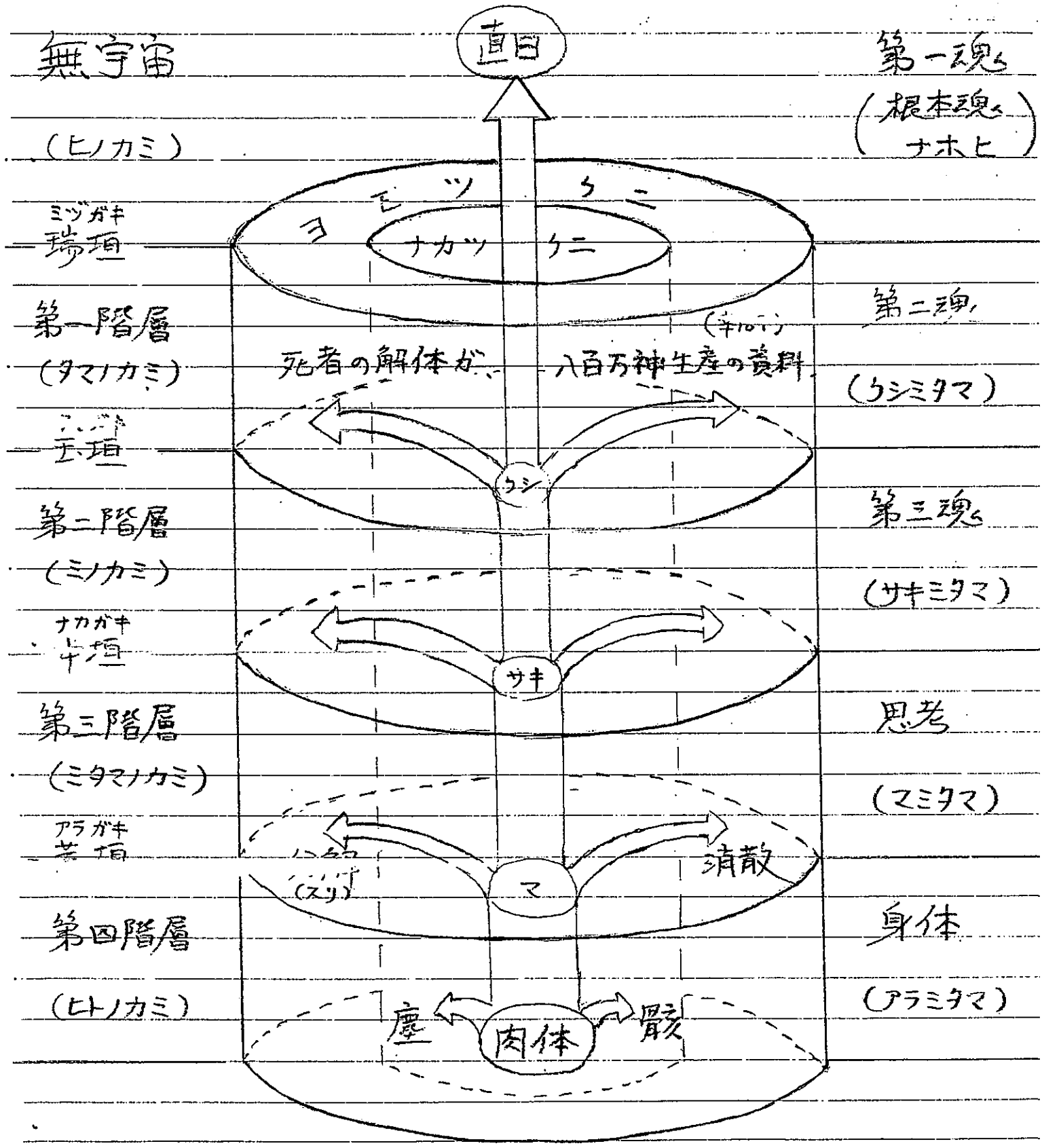


(月夜見のカミワザ)
ワガシとして
削り落とされる
部分。
→ヨモツクニへ
送られて
何かの素材となる。
(ソコドクミタマの
ソコドクミタマたる
ゆえんの部分)

真魂
(魂)
└滅ぶべき存在

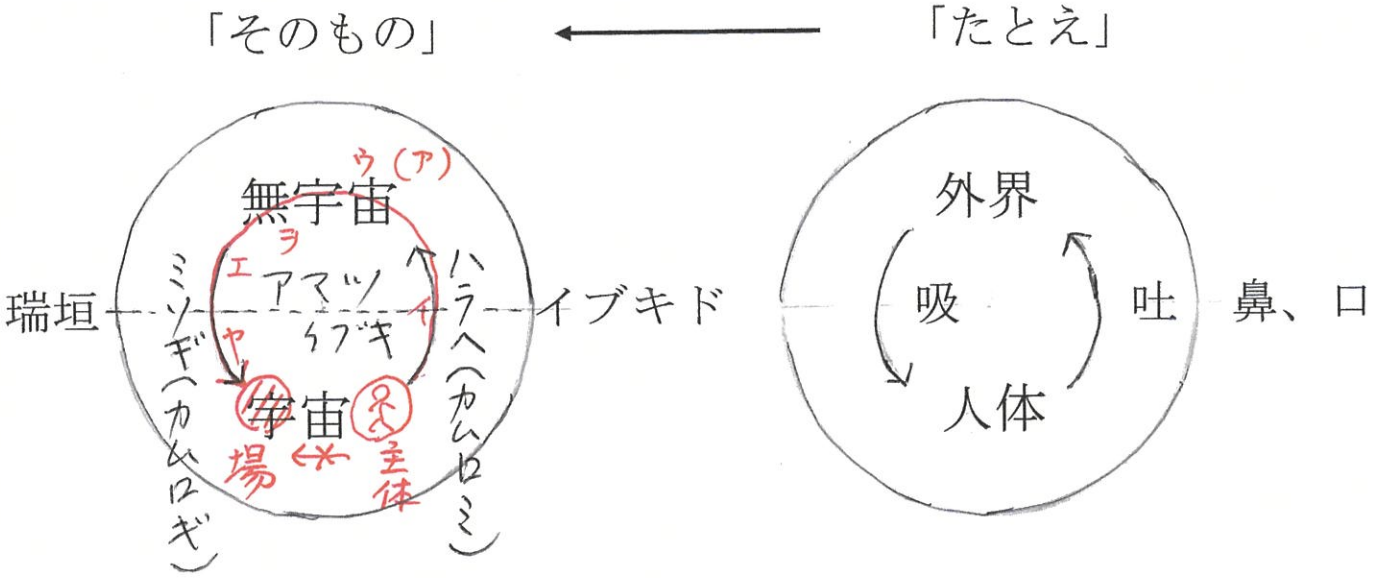
アワサクミタマとして残り
最終的にはヒスミノミヤで組み直されて
幸魂の新たな一部分となる。
(こちらを上へ導くのがサダビコノカミ)

死者のミタマと月読命の作用（はたらき）



零の作用と天津伊吹

コトタマとしての「イキ」は、本来、「零(ヒ)の作用」のこと。
「ミヅ」とも「イブキ」とも言う。
「零(ヒ)」そのものは、無宇宙と宇宙の間を自由に行き来するので、
それを呼吸に喩(たと)えたのである。
その意味においては、「瑞垣(ミヅガキ)」を「イブキド」とも言う。



帰天作法における「天津伊吹(アマツイブキ)」も、この意味であり、具体的には、
直日(ナホヒ)を「宇宙」の側から「無宇宙」の側へと「送る作用」を意味する。

○神と日神（ともに零の神）

	磐境としての高天原 ⇒ 祖神	高天原の主神
神名の上での区別	アマノミナカヌシノオホミカミ	アメノミナカヌシノカミ
	天照皇大御神	天照大御神
用語や神象の上での区別	○神（零で一で）	日神（二で一で）
	直霊、○、境地	直日、⊙、実在
	両者の活用を指して ひ（天照坐皇大御神）と云う	
未来288頁より	大宇大宙（宇宙と無宇宙をまとめた呼び名）	宇宙構成の基準
	大宇宙そのまま	原型
言霊の幸148頁より	未生、零、無きもの	物となった、一、初発
未来197頁より	「ア」発き発きて、果てなく限りない 「マ」円満具足 「アマ」大宇宙 （宇宙、無宇宙） すべてのものの産出者→祖 「イヘ」○	「イヘ」に「不断起滅の火」がある ↓ イヘに一点を点ずる⊙ イヘのあるじ→光 →「一点不滅の火」 →⊙→円満具足の箇体

火神(ヒノカミ)と日神(ヒノカミ)（ともに零(ヒ)の神(カミ)）

	磐境(イハサカ)としての高天原(タカマノハラ) ムスビ⇒	高天原(タカマノハラ)の主神
神名の上での区別	アマノミナカヌシノオホミカミ 祖神	アメノミナカヌシノカミ
	天照皇大御神(アマテラススメオホミカミ)	天照大御神(アマテラスオホミカミ)
用語や神象の上での区別	火神(ヒノカミ)（零(ヒ)で一(ヒ)で）	日神(ヒノカミ)（二(フ)で一(ヒ)で）
	直霊(ナホビ)、○、境地	直日(ナホヒ)、⊙(ヒカリ)、実在
	両者の活用(ハタラキ)を指して ひ(ヒトツ)(メヲ)（天照坐皇大御神）と云う	
その他	「ノ」の浄土、火国(ヒノクニ)、皇土	「カミ」の天祖(アメノミオヤ)、大中心
数理など	「四十」、胎、零(ヒ)の海(ウミ)	（四十の結びたる）「十二」

「零(ヒ)の海(ウミ)」それ自体には、本来「箇体」（数理では五）は存在していないが、それでも「零の海」は、全体として一個の「統一体」（数理「十」）である。

故に、「箇体の原型」を象徴する「四」の「十倍」で「四十」となる。

以上、秘稿の「命(のりと)」および「祖神と祖国」より

日本ノ古典ニハ此ノ国ヲ「莫囂圦隅」ト記載シテあめト傳ヘタリ。さやぎなきくにトノ義ナレバ囂キコト莫キ一圓光理ニ築キ成シタル国ナリ天国魂ナリトノ義ニシテ「如浮脂而」久羅下那洲多陀用幣流トモヘル「器」ナリ。其ノ「莫囂」ナルハ「修理固成是多陀用幣流之国」ノ意ニシテ「圓」トハ一圓相ナリ一圓光ナリトノ義ナレバ久羅下那洲多陀用幣流国土ノ修理固成シタル曉ハ圓光見耀タル鏡面ノ如クナリ「白鬚」「羅摩」等ト借字シタルかがみナルナリ。大圓鏡ト佛教ニ云フトコロノ虚空藏ナリ空ナリ無ナリ人間身ニテハ見聞覺知スルコト能ハザル窮極ナリ窮極トモ知ラレザル極ナリ宇宙無キナリ。此ノ宇宙無キ大圓鏡・虚空藏・かがみ・一圓光・一圓相・莫囂圦隅ガ宇宙ヲ築成シタル時ヲ大圓鏡智・虚空藏菩

経緯無クシテ経緯ヲ[redacted]現ズルハ現象世界ノ主體ニシテ現象世界ノ中心ニシテ現象世界ヲ現象世界タル人間身心ノ知リ得タル窮極ナリ。窮極ナルガ故ニシテ一切ニシテ最小ニシテ最大ニシテ箇體ナル宇宙トシテノ在ル限リナリ。

在ル限リナレバ窮數ニシテ滿數ニシテ最小ノ數ニシテ最大ノ數ニシテ最大最小ノ數ニシテ經緯ヲ認識シタル限リ無キ世界ナリ。故ニ有限ノ無限ナリ。

有限ノ無限ナル世界ヲ動世界ノ世界ト呼ブベク現象世界ヲ一貫シテ不變易ナリトノ義ナリ。

開華落葉榮枯盛衰生死遷流シツツ開華落葉榮枯盛衰モ生死遷流モ起伏成壞モ無キノ國ナリ。

之レヲ莫曇圓陣（カヤギキクニ）ト稱ヘテ大日本帝國ナル

ナレバ

タカマノハラ
高天原
神國ナリトナスナリ。

人類産出ノ根元ヲナストコロハ極ニシテ極ニシテ極ニシテ極ニシテ極ニシテ緯ノ極ニシテ緯即緯緯即經ナル一點ナレバ經モ無ク緯モ無ク現象世界ヲ成サザルナリ。故ニ無世界ノ世界ニシテ現象世界無キ現象世界ナリ人間身トシテハ見聞スル機能ヲ認メ得ザル世界ナリ。無ノ有ナリト呼ブノ外ナキナリ。

無ノ論スルハ人類ノ基準ガ人類自身ニシテ人類産出ノ根元ヲ知ラザルガ爲ナリ

経緯の別名　幸５１、９１頁より

あらゆる「箇体」は、必ず「経(タテ)」と「緯(ヌキ)」とから成る。

各々、別名は次のとおりである。

「経(タテ)」・・男(ヲ)（陽・雄・凸）、宇（時間）、「か」（天(てん)・乾(けん)）、父(ちち)、 ━ (いち)

「緯(ヌキ)」・・女(メ)（陰・雌・凹）、宙（空間）、「み」（地(ち)・坤(こん)）、母(はは)、 ═ (に)

「大宇宙そのもの」や「零(ヒ)そのもの」は、「箇体」ではない。

多数の「零(ヒ)」が集積して、一定の内部構造を獲得した段階を称して「箇体」と云う。

その構造は、「中心と外郭」という形で捉えることができるが、「経(タテ)と緯(ヌキ)」という形で捉えることもできる。

あえて言うならば、後者は「箇体の成立過程」を理解するための考え方であり、前者は「箇体の完成形」を把握するための考え方である。

また、神話では、「経(タテ)」のことを「成り余れる処」と、「緯(ヌキ)」のことを「成り合わざる処」と表現している。

その両者が合体して一個の「箇体」が成立したことを表現した図象が ㊡ である。

日本天皇国

多田　雄三

○大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

此の條文を剖けば二項となる。

○天皇ハ大日本帝国ヲ統治ス。

○天皇ハ萬世一系ナリ。

萬世一系とは一貫して変易すること無きなれば現象世界を超越して現象世界を抱括するの義なり。

現象世界とは箇体たる萬類萬物なれば経有り緯有るなり。之れを宇宙と呼びて大小長短広狭厚薄の存在なり。

此の現象世界を超越し抱括するとは、現象世界ならざるの現象世界なりとの意にして箇体ならず宇宙ならず人類萬類萬物等と呼ぶところとは異るなりとの義なり。

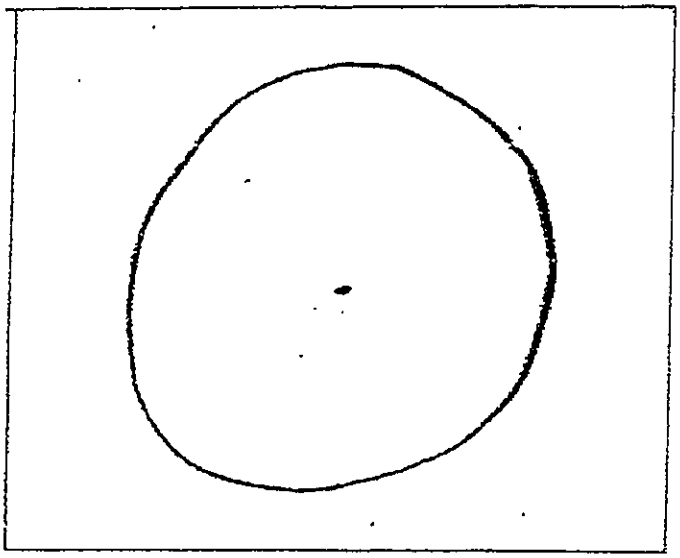
現象世界を否定して肯定したるなり。

否定すとは無にして、肯定すとは有なれば無にして有なるなり。現象世界無くして現象世界の有るなり。

肯定ノ否定――現象世界――萬類萬物――宇宙経緯――否定ノ肯定

儼として存在せりと認むるは宇宙たる人類の五感的意識なれども、人類産出の根元をなすところは極にして、経の極にして緯の極にして経即緯・緯即経たる一點なり。産出と呼ぶは構成せられたる中心との義にして箇体の根本なり。根本たる中心とは窮極なれば一點にして経緯無きの経緯なり、無世界の世界なり、現象世界無きの現象世界なり。

人間身としては見聞するの機能を認め得ざる世界なれば勿論図示すること能はざるなれども推理し認識することは難きにあらざるなり。



図一

経緯無き経緯たる此の一點は現象世界の主体にして、現象世界の中心にして、現象世界にして、現象世界たる人身の知り得たる窮極なり。窮極なるが故に一にして一切にして最小にして最大にして箇体たる宇宙としての在る限りなり。

在る限りなれば窮数にして満数にして最小の数にして最大の数にして、最大最小の数にして経緯を認識したる限り無き世界なり。故に有限の無限なり。

有限の無限なる世界を萬世一系の世界と呼ぶべく現象世界を一貫して不変易なるの義なり。開華落葉栄枯盛衰生死遷流しつつ、開華落葉も栄枯盛衰も生死遷流も起伏成壊も無きの国なり。

日本の古典には此の国を「莫蠶圓隣」と記載してアメと伝へたり。サヤナギ（キクニとの義なれば蠶きこと莫き一圓光裡に築き成したる国なり、天国魂なりとの義にして「如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉」と云へるは「蠶」なり。其の「莫蠶」なるは「修理固成是多陀用幣琉之国」の意にして「圓」とは一圓相なり一圓光なりとの義なれば久羅下那洲多陀用幣琉国土を修理固成したる暁は圓光晃耀たる鏡面の如くなり。「白欽」「羅摩」等と借字したるカガミなるなり。大圓鏡と佛教に云ふとこ

日本天皇国

多田　雄三

明治二十二年二月十一日公布せさせられし大日本帝国憲法第一條と第四條とに対する解説

○大日本帝国憲法第一條
大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス
○同第四條
天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ。

以上の二ケ條は帝国憲法中直接に大日本国体の何如にあるかを国法として規定したるところなり。

されば法治下に生活する帝国臣民は総べて此の法規を遵守せざるべからず。法文は簡潔にして條理の整然たるを上とすれば此の二ケ條も亦、もとより一字と雖疑義を挿むべきところ無きなり。

然るに世上某甲の憲法論憲法学説等に語有りて帝国憲法に対する解説を別題にす。

之れ断じて許すべからざる叛逆なり。

條理整然として一字だも動かすことは能はざる帝国憲法を又更に解説するは蛇足を添ふるに似たり。

然れども童蒙を教ふるには無用の文字も亦、時に有用なるを知る。故に今之れが小解を作り日本国憲の何如に尊厳に、何如に神聖に、何如に真実なるかを了得せしめ以って其の蒙を啓き、其の璞を磨き、其の雲霧を抜かしめんと希ふのみ。

逐次に分解し總合し、経より見、緯より眺め、上より瞰み、下より仰ぎ瞻つつ内容外範を知悉究盡せんことを期す。

○大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

此の條文を剖けば二項となる。

○天皇ハ大日本帝国ヲ統治ス。
○天皇ハ萬世一系ナリ。

萬世一系とは一貫して変易すること無きなれば現象世界を超越して現象世界を抱括するの義なり。

現象世界とは箇体たる萬類萬物なれば経有り緯有るなり。之れを宇宙と呼びて大小長短広狭厚薄の存在なり。

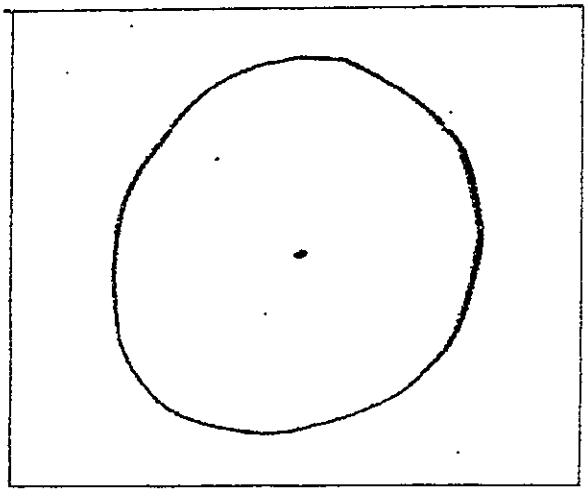
此の現象世界を超越し抱括するとは、現象世界ならざるの現象世界なりとの意にして箇体ならず宇宙ならず人類萬類萬物等と呼ぶところとは異るなりとの義なり。

現象世界を否定して肯定したるなり。

否定すとは無にして、肯定すとは有なれば無にして有なるなり。現象世界無くして現象世界の有るなり。

肯定ノ否定――現象世界――萬類萬物
――宇宙経緯――否定ノ肯定

儼として存在せりと認むるは宇宙たる人類の五感的意識なれども、人類産出の根元をなすところは極にして、経の極にして緯の極にして経即緯・緯即経たる一點なり。産出と呼ぶは構成せられたる中心との義にして箇体の根本なり。根本たる中心とは窮極なれば一點にして経緯無きの経緯なり、無世界の世界なり、現象世界無きの現象世界なり。



図一

人間身としては見聞するの機能を認め得ざる世界なれば勿論図示すること能はざるなれども推理し認識することは難きにあらざるなり。

経緯無き経緯たる此の一點は現象世界の主体にして、現象世界の中心にして、現象世界にして、現象世界たる人身の知り得たる窮極なり。窮極なるが故に一にして一切にして最小にして最大にして箇体たる宇宙としての在る限りなり。

在る限りなれば窮数にして満数にして最小の数にして最大の数にして、最大最小の数にして経緯を認識したる限り無き世界なり。故に有限の無限なり。

有限の無限なる世界を萬世一系の世界と呼ぶべく現象世界を一貫して不変易なるの義なり。開華落葉栄枯盛衰生死遷流しつつ、開華落葉も栄枯盛衰も生死遷流も起伏成壊も無きの国なり。

日本の古典には此の国を「葦舎圓隣」と記載してアメと伝へたり。サヤナギキクニとの義なれば舎きこと葦き一圓光裡に築き成したる国なり、天国魂なりとの義にして「如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉」と云へるは「舎」なり。其の「葦舎」なるは「修理固成是多陀用幣琉之国」の意にして「圓」とは一圓相なり一圓光なりとの義なれば久羅下那洲多陀用幣琉国土を修理固成したる暁は圓光晃耀たる鏡面の如くなり。「白蔡」「羅摩」等と借字したるカガミなるなり。大圓鏡と佛教に云ふとこ

日本天皇国

多田　雄三

（前略）

経緯無き経緯たる此の一點は現象世界の主体にして、現象世界の中心にして、現象世界にして、現象世界たる人身の知り得たる窮極なり。窮極なるが故に一にして一切にして最小にして最大にして箇体たる宇宙としての在る限りなり。

在る限りなれば窮数にして満数にして最小の数にして最大の数にして、最大最小の数にして経緯を認識したる限り無き世界なり。故に有限の無限なり。

有限の無限なる世界を萬世一系の世界と呼ぶべく現象世界を一貫して不変易なるの義なり。開華落葉栄枯盛衰生死遷流しつつ、開華落葉も栄枯盛衰も生死遷流も起伏成壊も無きの国なり。

日本の古典には此の国を「莫蠶圓隣」と記載してアメと伝へたり。サヤナギキクニとの義なれば蠶きこと莫き一圓光裡に築き成したる国なり、天国魂なりとの義にして「如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉」と云へるは「蠶」なり。其の「莫蠶」なるは「修理固成是多陀用幣琉之国」の意にして「圓」とは一圓相なり一圓光なりとの義なれば久羅下那洲多陀用幣琉国土を修理固成したる暁は圓光晃耀たる鏡面の如くなり。「白蔵」「羅摩」等と借字したるカガミなるなり。大圓鏡と佛教に云ふところの虚空蔵なり。

（中略）

此の宇宙無き大圓鏡・虚空蔵・カガミ・一圓光・一圓相・莫蠶圓が宇宙を築成したる時を大圓鏡智・虚空蔵菩薩・ミカガミ・一圓光明体・一圓相・莫蠶圓隣と伝へたるところにして、其の宇宙無きの宇宙をも宇宙を築きたる時をも共に「高天原」と伝へ、一圓相と教へたれば宇宙無きの宇宙を空零にて示し左図を描き得るなり。（図略）

此の築き成したる国たる莫蠶圓隣をヒノワカミヤと教へて萬世一系なれば天皇と称へまつるに当るなり。アメにして圓光晃耀なれば白玉の合成文字たる皇を充当し、天を充当し合せて天皇と熟したるは、支那人所用の天皇氏地皇氏の天皇の文字を借りて日本語を飜譯したるものにして、一にして一切たる最大最小の数理なるは宇宙たる箇体の見たる事理にして箇体無き宇宙無きの箇体、宇宙より瞰る時は三十六の数理にして百二十・十二・六十三・三百六十・一二三四五六七八九十百千萬にして、三十六神界と称する時は「久延毘古」と伝へ、百二十神界は「意富加牟豆美尊」、十二神界は「伊邪那岐神」、六十三神界は「伊頭能賣神」、三百六十神界は「瓊瓊杵尊」、一二三四五六七八九十百千萬神界は「饒速日尊」にして、「伊弉諾尊神功既畢登矣天報命留宅於日之少宮」と伝へたる「日若宮」とは此の十二神界にして莫蠶圓隣の中なる一國ヤマトなり。（中略）

大宇宙の大中心を日本天皇の祖神と称へまつるべきなれば、天照皇大御神にして之れを日本民族発祥の日なりとなすなり。

（中略）

天照大御神出生の高天原たる莫囂圓なれば国無きのヒなるなり。火にして日にして一にして

（中略）

此の日は国を産出するの祖なれば、大日本帝国憲法の條文には現れざることと拝察し奉るなり。

如是にして築き成したる国をばミカガミと称へまつるところなれば、天津磐境にして皇土なること固よりなり。

されば皇土たる大日本国は天皇統治の神国なること亦固よりなり。

（中略）

此の高天原は日本天皇の領土にして日本民族発祥の神界にして天津神国津神命以ちて領有坐邦土なり。「羅摩船」と記載したるところにして「三十二人供奉」と云へる饒速日尊奉戴の「伴緒」なり。

（中略）

「五伴緒」とは数理としての五を冠したる伴緒なりとの義にして、正誠正義の言論行為を行使して築き成したる皇土なり、浄地なり、「天国魂」なりとの意なり。

（中略）

されば箇体たる一切の資料が整理せられたる暁をカミと称へ、カミヨと呼びカミノヨ・カミノクニと讃美し、カミノヒトと崇敬して尊貴なれば尊の支那文字を借りてミコトの日本語に充当て用ゐて日本天皇を称へまつれるなり。天皇とは尊にして神にして神人にして民人の如き箇人にてはましまさぬなり。

（中略）

斯くて天照大御神は莫囂圓隣なる最大最小の天国にして伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の修理固成したるところなれば宇宙の中心にして大宇宙の大中心を中心となせることを知らるるなり。

之れを宇宙たる箇体成立の基準となす。

（中略）

故に命は天命にして神代の神にして人間身としては窺ひ知ること能はざるヒなるなり。

ヒは莫囂圓にして、ヒの国は莫囂圓隣にして共に天照坐皇大御神の修理固成なる祕儀密事なり。

天照坐皇大御神とは伊邪那美神の別名にして火神と称へまつるなり。「火夜藝速男神・火炫比古神・火迦具土神・伊邪那美神者因生火神而神避坐也。」火神を生みまして神避ますは伊邪那美神即火神なりとの義にして、地界平定妖魔調伏の神徳を顕彰し給へるを示したるなり。

（中略）

産出したる宇宙はアメなれば莫囂圓隣にして「我が主」にして根本魂なりとの義なり。

此の根本魂を直日と教へて産霊の神と称へまつるなり。魂なる支那文字をムスビなる日本語に充当てたるは此の故にして「生魂・足魂・玉留魂」「皇産霊」と記載したる神言霊なり。

（中略）

然れども、一切の宇宙が悉く然りと云ふにはあらざるなり。大宇宙の大中心たるヒを根本中心として築き成したる宇宙にして人にしてはじめて、其の中心は高天原なり、天照皇大御神なり、天津神なり、国津神なりと知るべきなり。

世界邦土、人類民族多しと雖、天津神の命以ちき築き成したる人の必しも多からざるは、正義必しも行はれず善行必しも賞せられず、然のみならず、奸黠却って横行し邪悪日夜に跋扈するを見て推定せらるるなり。

邪悪醜陋の妖魔を調伏し済度して正誠善美の神業神事に従はしむるは、天皇の神徳にして日本建国の精神にして「八尺勾魂」と教へたる神言霊なり。

如此の相（図六）を調伏せられたる妖魔となす。更に済度し救出したる時は左図（図七）の如くなるべし。

（図略）

又更に誘導して天津神宮に摂入したる時は、重重無畫の圓光と化りて晃耀赫灼たる五色光なり。

（中略）

天津神宮たる日若宮より火神の神宮に入る時は、一圓相にして一音響にして人間身としては描くべき方圖を知らず、語るべき言語も無きなれどもヒなりと云ひ、ヒカリなりと呼びて類推せしむるなり。人若誤り認めて球の如く圓の如くなりとなさば相距ること幾千萬里のみにあらざるべし。

（中略）

「八尺勾魂・鏡・叢雲劍」「常世思金神」「佐久久斯侶伊須受能宮」と伝承したるは火神の神宮を知らしめんとの神慮畏きことなるべしと拜しまつるなり。

（中略）

而して火神の神徳とは天照坐皇大御神にして、火神宮とは天照皇大御神にして、火神宮を修理固成なすなるは伊邪那岐命伊邪那美命二柱神にして、其の火神宮より産出し給へるは天照大御神にてましますなり。

天照大御神とたたへまつるは天皇にてましますこと上に述べたるが如くなれば、大日本帝国を統治し給ふは天皇にして天照大御神にして伊邪那岐命伊邪那美命二柱神にして、即、大日本帝国に外ならざるなり。

古老は此の義を教へてノリトなりと云へり。

ノリトは法なれば現象世界の主體たる本體世界にして、活用を現ずる體なると共に活用たる機関なり體にして用にして、體用不一不二なる原則なり。此の原則を認めて人間社会を此の原則の如く運用せんとするものに法人なる規定存り。人格と認めたる組織體系にして機関なると共に主體を具備したるなり。

（後略）

人間身としては見聞するの機能を認め得ざる世界なれば勿論図示すること能はざるなれども推理し認識することは難きにあらざるなり。

経緯無き経緯たる此の一點は現象世界の主体にして、現象世界の中心にして、現象世界にして、現象世界たる人身の知り得たる窮極なり。窮極なるが故に一にして一切にして最小にして最大にして箇体たる宇宙としての在る限りなり。

在る限りなれば窮数にして満数にして最小の数にして最大の数にして、最大最小の数にして経緯を認識したる限り無き世界なり。故に有限の無限なり。

有限の無限なる世界を嵩世一系の世界と呼ぶべく現象世界を一貫して不変易なるの義なり。開華落葉栄枯盛衰生死遷流しつつ、開華落葉も栄枯盛衰も生死遷流も起伏成衰も無きの国なり。

日本の古典には此の国を「莫囂圓隣」と記載してアメと伝へたり。サヤナギキクニとの義なれば囂きこと莫き一圓光裡に築き成したる国なり、天国魂なりとの義にして「如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉」と云へるは「囂」なり。其の「莫囂」なるは「修理固成是多陀用幣琉之国」の意にして「圓」とは一圓相なり一圓光なりとの義なれば久羅下那洲多陀用幣琉国土を修理固成したる暁は圓光晃耀たる鏡面の如くなり。「白欬」「羅摩」等と借字したるカガミなるなり。

日本天皇国（二）

多田　雄三

「八尺勾魂・鏡・叢雲劔」「常世思金神」「佐久久斯侶伊須受能宮」と伝承したるは火神の神宮を知らしめんとの神慮畏きことなるべしと拜しまつるなり。

「甕速日・建御雷・建布都・豊布都・暗淤加美・闇御津羽・正鹿山津見・淤縢山津見・奥山津見・闇山津見・志藝山津見・羽山津見・原山津見・戸山津見・大雷・火雷・黒雷・折雷・若雷・土雷・鳴雷・伏雷・豫母都志許賣・意富加牟豆美・伊邪那美・伊邪那美神黄泉津神・道敷神・道反神・塞坐黄泉戸神・衝立船戸・道長乳歯・時置師・和豆良比能宇斯・道俣・飽咋宇斯・奥疎・奥津那藝佐毘古・奥津甲斐辨羅・邊疎・邊津那藝佐毘古・邊津甲斐辨羅八十禍津日・大禍津日」之れを火神の神徳となすなれば其の神宮の大要もまた之れに依りて窺ひまつることを得べきなり。

而して火神の神徳とは天照坐皇大御神にして、火神宮とは天照皇大御神にして、火神宮を修理固成なすなるは伊邪那岐命伊邪那美命二柱神にして、其の火神宮より産出し給へるは天照大御神にてましますなり。

天照大御神とたたへまつるは天皇にてましますこと上に述べたるが如くなれば、大日本帝国を統治し給ふは天皇にして天照大御神にして伊邪那岐命伊邪那美命二柱神にして、即、大日本帝国に外ならざるなり。

古老は此の義を教へてノリトなりと云へり。

ノリトは法なれば現象世界の主體たる本體世界にして、活用を現ずる體なると共に活用たる機関なり體にして用にして、體用不一不二なる原則なり。此の原則を認めて人間社会を此の原則の如く運用せんとするものに法人なる規定存り。人格と認めたる組織體系にして機関なると共に主體を具備したるなり。

法蔵比丘が成佛して阿彌陀と呼ぶところの佛国土は此の法蔵比丘佛国にして、佛人格なり、中心確立せる人格的佛體なり、宇宙なり、否、寧、人格的宇宙なりと日本佛教者の説くところの佛国土は正に此の法人にして、法の上に建設せられたる社会なるに外ならざるなれば、ノリたる原則を運用せんとはすれども、必しも其の原則の行われ得るや否やを知ること能はざるのみならず、人為なるが為に破綻を来し齟齬を招ぐことあるべき不完全體なり。

能はざるなれども推理し認識することは難きにあらざるなり。

経緯無き経緯たる此の一點は現象世界の主体にして、現象世界の中心にして、現象世界にして、現象世界たる人身の知り得たる窮極なり。窮極なるが故に一にして一切にして最小にして最大にして箇体たる宇宙としての在る限りなり。

在る限りなれば窮数にして満数にして最小の数にして最大の数にして、最大最小の数にして経緯を認識したる限り無き世界なり。故に有限の無限なり。

有限の無限なる世界を萬世一系の世界と呼ぶべく現象世界を一貫して不変易なるの義なり。開華落葉栄枯盛衰生死遷流しつつ、開華落葉も栄枯盛衰も生死遷流も起伏成壊も無きの国なり。

キクニとの義なれば囂きこと莫き一圓光裡に築き成したる国なり、天国魂なりとの義にして「如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉」と云へるは「囂」なり。其の「莫囂」なるは「修理固成是多陀用幣琉之国」の意にして「圓」とは一圓相なり一圓光なりとの義なれば久羅下那洲多陀用幣琉国土を修理固成したる暁は圓光晃耀たる鏡面の如くなり。「白歛」「羅摩」等と借字したるカガミなるなり。

基本図D. 無宇宙の内部構造

（教本 2-1-4. 秋橋『日本天皇国』の解説. より）

この図、全体が無宇宙である。

（図表1：高天原の中核部分）

「三神即一身」の三神

ヒノカミノカミミヤ
火神宮（コトアマツカミの領域）
（道化参神ほか）
ヒノカミ
火神、天照皇大御神

バクガウエン
莫翼圓
大宇宙の大中心
極大極小

産出.
ヒノカミ カミワ
火神の神徳としての
天照皇大御神
（修理固成と見做せば二柱神）

アマツカミミヤ
天津神宮（アマツカミの領域）
（ヒノカミとしての三貴子）
ヒノカミ
日神. 天照大御神

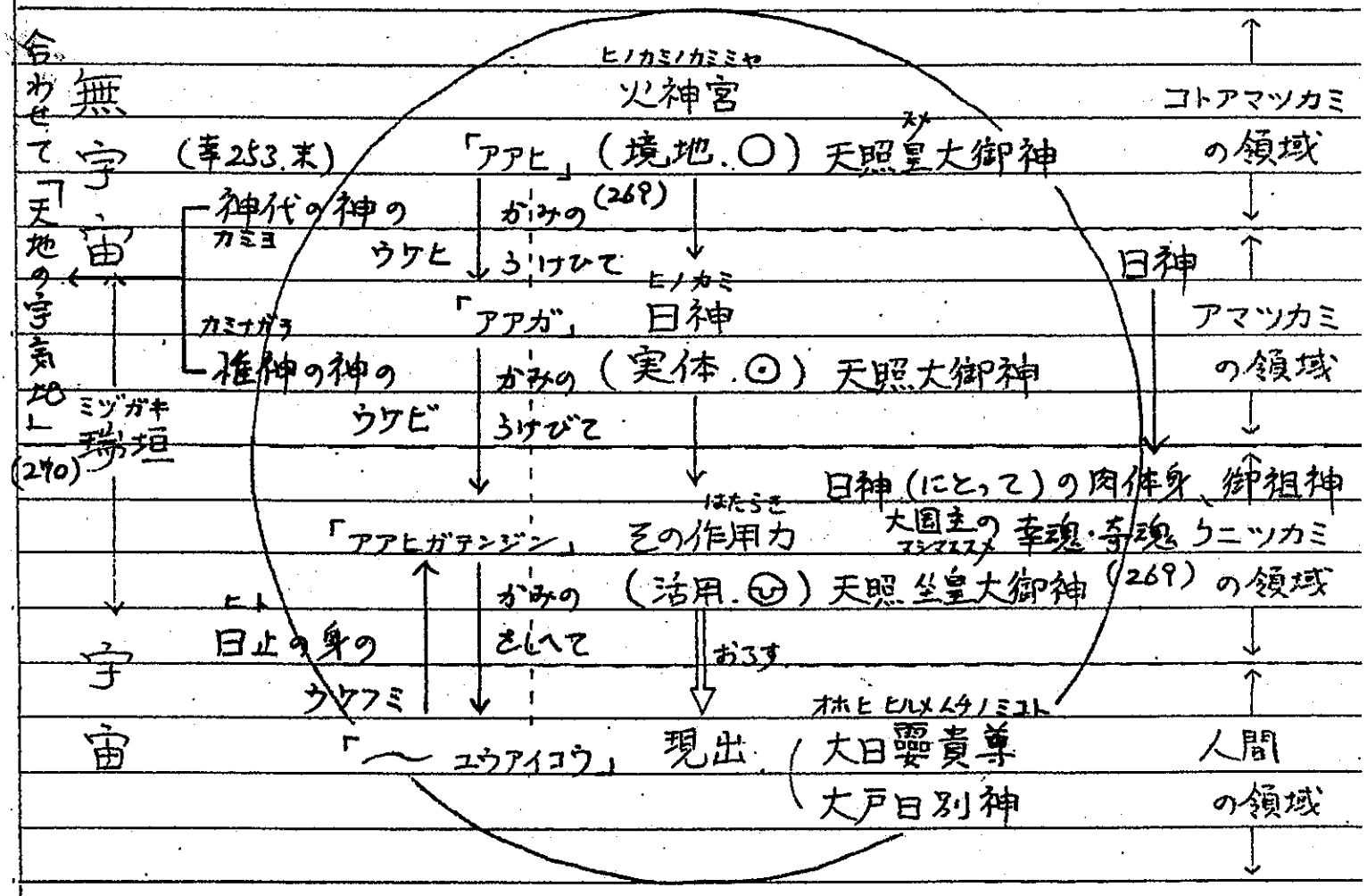
バクガウエンリン
莫翼圓隣
宇宙の中心
最大最小

ミヅガキ
瑞垣

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

（あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、日神（ヒノカミ）の作用力（はたらき）は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。）



三 万葉では海藻をメと訓んでいる。アラメ、ニギメ、ワカメの類。柄は茎、鎌りは刈りの意。
四 錐揉式発火法に用いる小穴のある板。ここは海布(め)の株をそれに見立てたのであろう。
五 和名抄には石蓴(コモ)の一名を海蓴としている。俗に言うアヲサとかホンダハラとか解されているが明らかでない。
六 錐揉式発火法に用いる先の尖った棒。
七 太陽の照り輝く新しい宮殿。
八 火を焼いて凝り固まらしめて。
九 カジの木の皮の繊維で作った白い縄の非常に長い縄を海中に延ばして。延縄(はえなわ)のこと。
一〇 口の大きい、尾や鰭のピンと張ったスズキ。
一一 ざわざわと音をたてて。
一二 記伝に、打竹は拆竹の誤りであろうとしている。破(も)り竹の簀も撓むほどに。
一三 おさかなの料理。
一四 日嗣の御子の意。
一五 支度。
一六 書紀には「天津彦彦火瓊瓊杵尊」「天津彦火瓊瓊杵尊」「天津彦国光彦火瓊瓊杵尊」「天津彦根火瓊瓊杵根尊」「天国饒石彦火瓊瓊杵尊」「火瓊瓊杵尊」「天饒石国饒石天津彦火瓊瓊杵尊」と種種に伝えられている。天ニキシ国ニキシは未詳。天津日高は天津彦で、虚空津日高(ソラツヒコ)に対する語、前者は言わば天皇に対する尊称であり、後者は皇太子に対する尊称である。日子は彦、番能邇邇芸命は記伝に「穂の丹饒君」で稲穂に因んだ名としているが明らかでない。或いは「穂の饒々(熟々)」で稲穂の熟した意か。
一七 書紀には栲幡千千姫とある。名義未詳。

1 天孫の誕生

邇邇芸命

して、櫛八玉神、鵜に化りて、海の底に入り、底の波邇(一)(此の二字は音を以ゐよ。)を咋ひ出でて、天の八十毘良迦(二)(此の三字は音を以ゐよ。)を作りて、海布の柄を鎌りて、燧臼(四)に作り、海蓴(五)の柄を以ちて燧杵(六)に作りて、火を鑽り出でて云ひしく、

是の我が燧れる火は、高天の原には、神産巣日御祖命の、登陀流(七)天の新巣の凝烟(八)(凝烟を訓みてススと云ふ。)の、八拳垂る摩弖(九)(摩弖の二字は音を以ゐよ。)焼き挙げ、地の下は、底津石根に焼き凝らして、栲縄(九)の、千尋縄打ち延へ、釣為し海人の、口大(一〇)の、尾翼鱸(はたすすき)(鱸を訓みてスズキと云ふ。)佐和佐和邇(一一)、(此の五字は音を以ゐよ。)控き依せ騰げて、打竹(一二)の、登遠遠登遠遠邇(此の七字は音を以ゐよ。)天(一三)の眞魚咋、獻る。

といひき。故、建御雷神、返り参上りて、葦原中國を言向け和平しつる狀を、復奏したまひき。

爾に天照大御神、高木神の命以ちて、太子(一四)正勝吾勝勝速日天忍穂耳命に詔りたまひしく、「今、葦原中國を平け訖へぬと白せり。故、言依さし賜ひし隨に、降り坐して知らしめせ。」とのりたまひき。爾に其の太子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命、答へ白したまひしく、「僕は降らむ裝束(一五)しつる間に、子生れ出でつ。名(一六)は天邇岐志國邇岐志(邇より志までは音を以ゐよ。)天津日高日子番能邇邇藝命ぞ。此の子を降すべし。」とまをしたまひき。此の御子は、高木神の女、萬幡豊秋津師比賣命(一七)に御

ここは狭(せば)の意。
八 問いただすことは。
九 道なるものをの意。
一〇 サルダは琉球語のサダルがサルダに転じた語で、先導の義。即ち天孫の先導を承ったところからの名であると伊波普猷氏は説かれた。猨(猿)はサの仮名に使われている場合もあるので、猨田はサダで、佐田(佐多)の岬のサダと通じる語であるかも知れない。

2 猨田毘古神

しかし下の猨女(サルメ)の事と思い合せて、サルダと訓むことにした。なお考うべきであろう。
一一 御先導をしようと思って。
一二 参り迎えの意。書紀の一書には「奉レ迎相待」とある。
一三 書紀の一書には「五部神」とある。伴または部は同一職業の団体、緒は長の意。
一四 書紀の一書には「使二配侍一焉」とある。それぞれの職業を分掌させて天孫に従わしめて。
一五 招きしで、天照大御神を石屋戸から招き出したの意。璁と鏡にかかる。
一六 この神は石屋戸の条には見えていない。門を守る岩石の神。別は尊称。
一七 書紀の一書には「吾児視二此宝鏡一、当レ猶レ視レ吾。可二与同レ床共レ殿、以為二斎鏡一」とあって、護身の鏡として授けられたことになっている。
一八 御魂の御前の事で、天照大御神のし給うまつりごと。神の朝廷(みかど)の政事の意。天皇(すめ)が朝廷の政事に対している。
一九 その事を身に引き受けて執り行って。
二〇 天照大御神の御魂代の鏡と思金神。

3 天孫降臨

合して、生みませる子、天火明命。次に日子番能邇邇藝命二柱なり。是を以ちて白したまひし隨に、日子番能邇邇藝命に詔科せて、「此の豐葦原水穂國は、汝知らさむ國ぞと言依さし賜ふ。故、命の隨に天降るべし。」とのりたまひき。

爾に日子番能邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天の原を光し、下は葦原中國を光す神、是に有り。故爾に天照大御神、高木神の命以ちて、天宇受賣神に詔りたまひしく、「汝は手弱女人にはあれども、伊牟迦布神(伊より布までは音を以ゐよ。)と面勝つ神なり。故、專ら汝往きて問はむは、『吾が御子の天降り爲る道を、誰ぞ如此て居る。』ととへ。」とのりたまひき。故、問ひ賜ふ時に、答へ白ししく、「僕は國つ神、名は猨田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、參向へ侍ふぞ。」とまをしき。

爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、幷せて五伴緒を支ち加へて、天降したまひき。是に其の遠岐斯(此の三字は音を以ゐよ。)八尺の勾璁、鏡、及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまひしく、「此れの鏡は、專ら我が御魂として、吾が前を拜くが如伊都岐奉れ。次に思金神は、前の事を取り持ちて、政爲よ。」とのりたまひき。此の二柱

大宇大宙の大中心

はてしと神の零ヒ

高御産巣日神（イザナギ／カムロギ）

隠身天之御中主神（零ヒ・根本種子）

神産巣日神（イザナミ／カムロミ）

宇宙（時空）全体の中心

はてしと神の魂タマ

月読命

天照大御神

建速須佐之男命

人類世界（地球）の中心

はてしと神の身ミ

石長比売

皇御孫之命

木花之佐久夜毘売

一体化

と称へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

（スメミマと一体化）大冨会

意冨耶馬台須米良岐美（理想上の天皇）

葦原醜男（大国主の別名）

八重事代主（大国主の息子）

と称へまつるのである。（即位式）（人間身（皇太子））

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し「人類世界の中心」として機能することによって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコヲとやへコトシロヌシの諸力をも行使できるようになるのである。

ところがその国は本来神魔包括の◎ヒの神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五冨的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコヲは生大刀・生弓矢で八十神を平定する修理の諸力。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしましますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

やへコトシロヌシは話さまとめる、などの国成（カムナリ）の諸力。

ば零の内容が二であり三であり四五六七八九であり然うして一であり十であるが為に其の一二三四五六七八九の加減乗除が美とも醜とも善悪とも正邪曲直とも変化し治乱興廃ともなるのである。之を換言すれば善悪も美醜も正邪曲直等も「我」の外なるものではないのである。此の「我」を古聖は「如来」と呼ばれた。そこで

「如此依志奉志国中爾荒振神等乎婆神問志問志賜神掃掃賜比氐語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氐天磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐天降依志奉伎。」

と、高天原なる皇親の命には人の国を神の国と築き成されて建国の天道をお示し遊ばされたのである。此処で注意すべきことは「天磐座・天降」の文である。「天磐座」は〇界であるから説明語の用ゐやうが無い。けれども此処に用ゐた文字に従つて堅固の意とするならば堅固になること此の上も無い。が此の「磐」は「イハサカ」の「イハ」と等しく正しく発き升る義を表したのである。それ故に人間から仰げば「天降る」であらうが「高御座」たる「天磐座」の御光は十方に等しく発くので「正しく升る」ので方位に拘はるのではない。十表に雄走る稜威（カミノミイツ）である。神代に於ては之を「稜威雄走神（イツノヲバシリノカミ）」と称へまつる。その雄走が発き発くのであるから茲に「天磐座放」とある「放」は「従」の誤りである。若しも「放」とするならば下降転落で不祥の語となる。天之磐座を放れずして天降りましますが故に神位なのである。此の神位を高御座として国土を経綸し給ふが故に重重無尽の円光として万世一系にましますのである。

既に述べたる如く中心は唯一超絶の零神（ヒノカミ）でそれが高天原にては皇親神漏岐神漏美命と仰ぎまつられ神国浄地を築きては皇御孫之命と讃へまつらるるのである。然うして皇親の神には建国の大本をお示し遊ばさるると与に悪神邪鬼をば教へ諭して其禍（マガ）を掃ひ清め草木の一葉までも乱れ擾ぐこと勿らしめてさて高天原なる神座より神代の

の勅命のままに猛然踊躍してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯是一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。

斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依左志奉志四方之国中斗大倭日高見之国乎安国止定奉氐下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氐皇御孫之命乃美頭乃御舎仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隠坐氐安国止平気久所知食武。」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外廓たる八百万神との関係を教へて先其の中心の確立と外廓の統一とを命ぜられ第二段では外廓の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのままなる神国浄地を人間世界に築き成したる暁を第三段に詳述せられたのである。

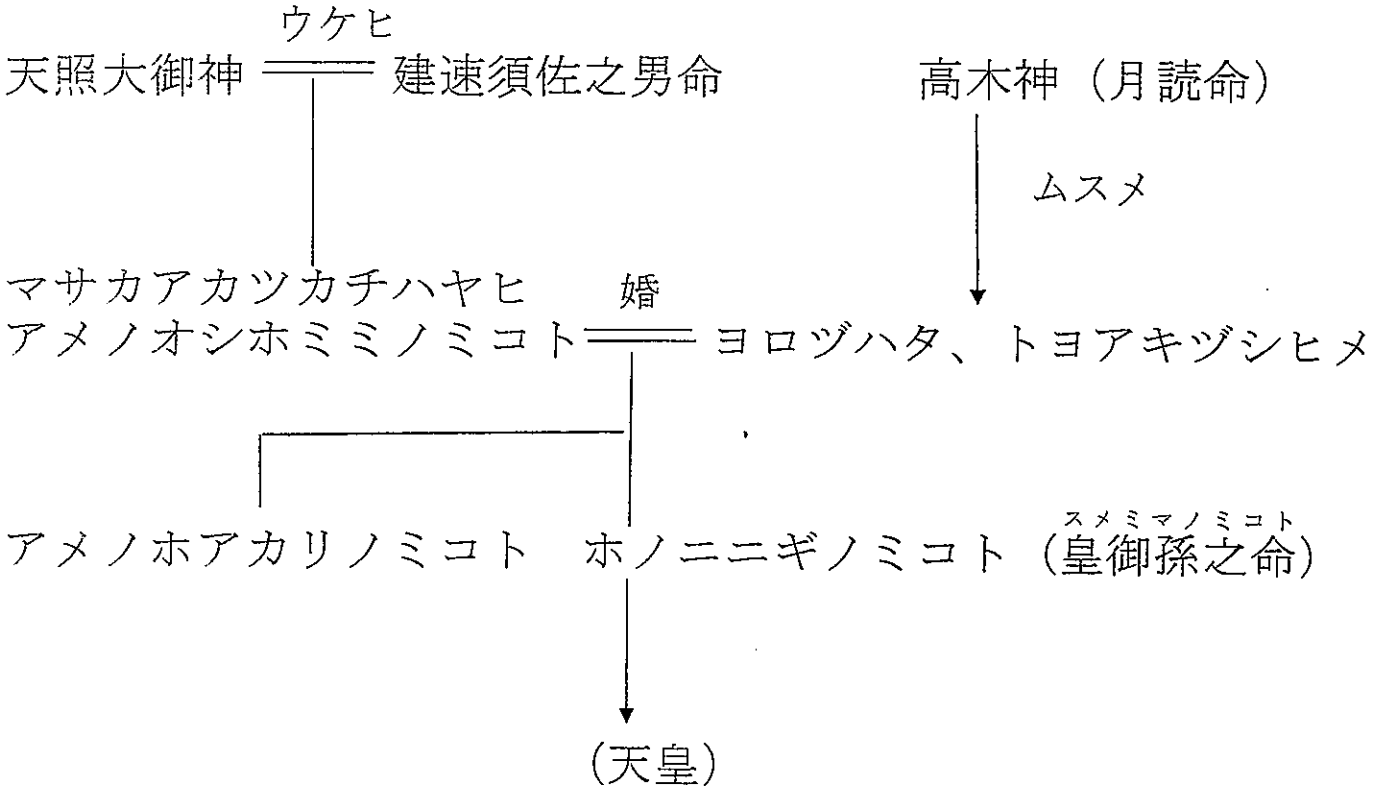
その神国浄地は「大倭日高見之国」と呼ばるるので「四方之国」を外廓として緯の在るかぎりと「下津磐根」「高天原」と下の下までも上の上までも経としての在るかぎりとを「美頭乃御舎」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に隠り「隠身天之御中主神」のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らけく平けく統治統率せさせ給ふ。

それは人間身として拝しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にてましまし隠身の神としての天之御中主神にてましますが故に近く図解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一点之火」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是経に緯に際涯無き日なる光である。之を「日神」とも「⊕」とも「・|○」とも称へて来たのは人間身の機能相応に判り易からしめた神の御恵である。

日神によって完成された宇宙全体を表現する時は「・|⊙」と描く。

(262図)

古事記　１２５～１２７頁　略系図



高木神の正体が月読命であると考えて初めて、

天孫は、三貴子の諸力を等しく受け継いだ存在となる。

NO.

DATE 2019・8・6

古事記における系譜

アマテラスの嫡子　①代目　高木神（ツキヨミ）の娘

アメノオシホミミノミコト ＝ ヨロヅハタトヨアキヅシヒメ

（未来143、未完成）

未来143では、三貴子の神徳をすべて兼ね具えたので、スメミマと呼ばれる。

兄、アメノホアカリノミコト　（記、127）

（旧事紀によれば ニギハヤヒノミコト、と同じ）

（天神御祖命では 日神、⊙）

（多田流では、カムアガタカアシツヒメ）

姉　②代目　カムアタツヒメ、妹

イハナガヒメ ＝ 弟、ホノニニギノミコト ＝ 別名、コノハナサクヤビメ

（書紀では、スメミマノミコト）

別名、コノハナチルヒメ、

（ウツムロ、で出産）

無宇宙

ここまでは、ヒノカミ

↓ としての御生誕

（ワタツミノ イロコノミヤより）

③代目

兄 ホデリノミコト（海幸彦）

末弟 ホヲリノミコト（山幸彦）＝ 姉 トヨタマビメ、

別名 ホホデミノミコト

兄 ホスセリノミコト

④代目

ウガヤフキアヘズノミコト ＝ 妹 タマヨリビメ

（ここまでは、神話上の存在であって、歴史的な実在の人物ではない。）

↓

神武天皇ら五人兄弟

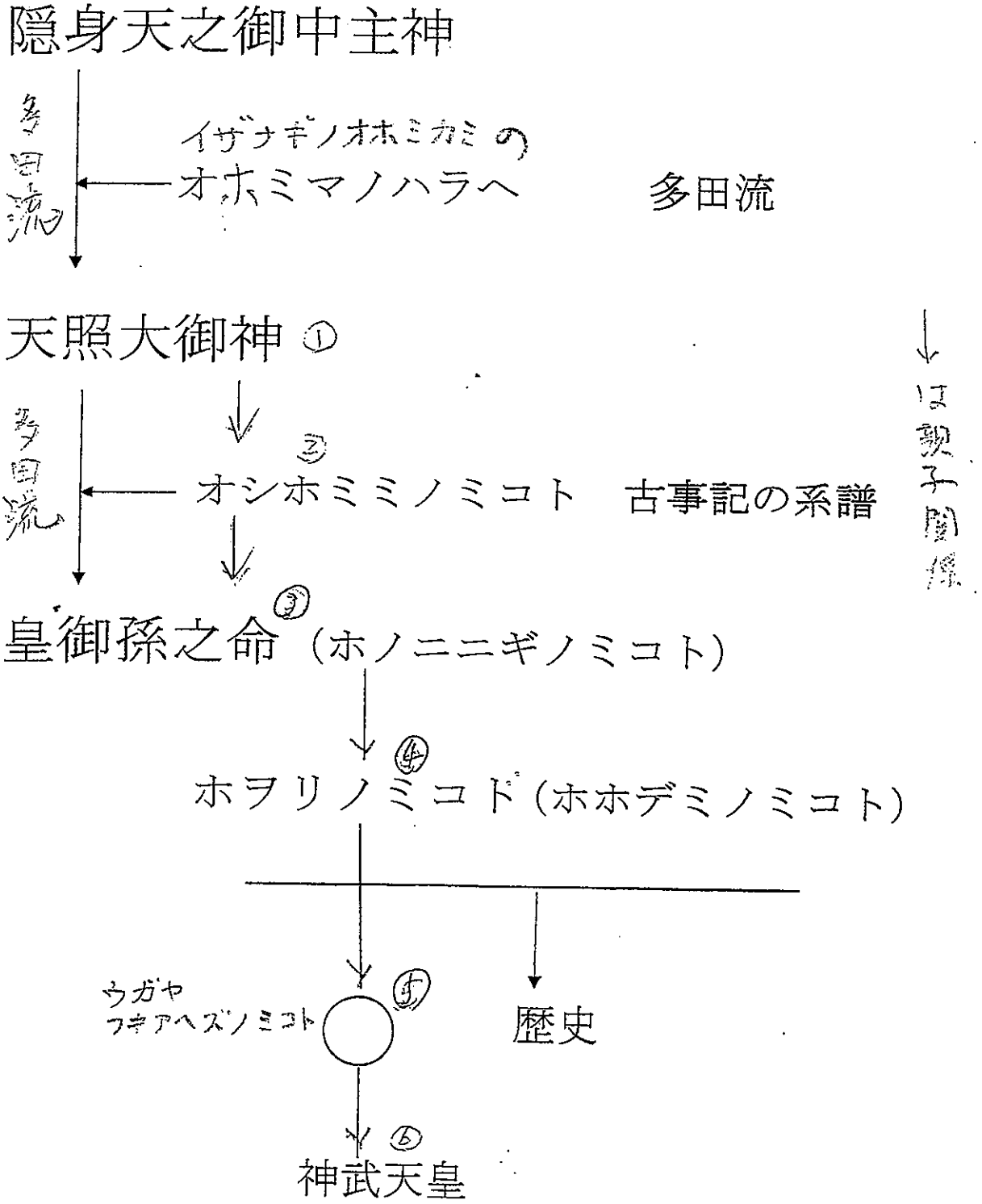
⑤代目　（記、147）

アマテラスの「五代の孫」なので、「正統な継承権」を持つ。

（オホクニヌシはスサノヲの「六代の孫」）

KOKUYO

〈多田氏による古事記神話の解釈〉



No.

Date

未来143頁より

高天原 ―――― 人間界

母胎としての高天原　　母の胎内

天忍穂耳命
（未完成）

胎児
（まだ完備した人間界ではない）

（天孫降臨）　ナリテ
成生る

（誕生）
（生）

オノニニギノミコト
（神徳を完備）

現世

「過去を祓へ」と云ふ。

過去を祓ひ、また過去を祓ひ、祓ひ祓ひて、母の胎内に入る。其処は、人間身としての高天原。否。いまだ、完備した人間身とは言ひ得ない。けれども、現世に最近い身である。その身としての楽土である。此の境を、天照大御神の高天原では、天忍穂耳命と称へまつる。

命の神徳は、正哉吾勝勝速日であるから、之れは、いまだ国を成さぬのであり、成りかかつても、まだその国は稚くして、水に浮きて居る膏のやうな状態である。

「正哉吾勝勝速日だ」とは、建速須佐之男命が天照大御神との宇気比に、彦御子を得て、「吾勝てり」と勝ち誇り、その国の完成をも待たずに、高天原を掻き乱した神性を指すので、「未完成」なのである。「完成すべくして未然らざるもの」である。

此の未完成なるものが萌騰て葦牙の如くに成生る。それを「火之瓊瓊杵尊」と称へまつり、六道十界統治の神徳を完備されるのである。その暁を讃美して「皇孫」と称へまつる。則ち、「神の独子」であり、「仏陀」である。

それを、後世日本では、天皇と仰いだのである。そこへまた、支那風が加はつて、「天皇陛下」と称へて来た。

天皇ノ統治シタマフハ天皇国デアリ。神聖統率シタマフハ
日高見ノ国ト呼ブノデアル。共ニソレハ豊葦原
瑞穂ノ秀国デ。憙哉　可美初国。讃美スルノデアル

第一章　完

註）　天津神と国津神との区別について。

多田流では、

天津神とは、無宇宙の側に属する諸力・諸実体。

「○(ヒ)が○(ヒ)のままに産霊(ムスビ)産魂(ムスビ)たる神(カミ)」のこと。

国津神とは、宇宙の側に属する諸力・諸実体。

もはや○(ヒ)ではない⊙(ミ)を築いた神、のこと。

（言霊の幸、196-197頁ほかを参照）

神話や祝詞では、

天津神とは、高天原(たかまのはら)（天上の神界）に坐す神々のこと。

国津神とは、黄泉国(よもつくに)など、地上の神界に坐す神々のこと。

（古事記や延喜式祝詞を参照）

神國築成

カミナガラ カミノカミワザ アメナルヤ ミナカノカミト カミカカリマス

多田雄三

人間心渾沌天地未剖唯有萌芽而耳矣。
日神事功成而天地初發而人間※神矣。
天狹霧國狹霧天讓日國禅日之日神成生
於高天原也矣哉。　※解読不明

天御中主大御神

九州の一角宇佐ノ地ニ「あまのみなかぬしのおほみかみ」ノ傳有リ。先師川面凡児先生ハ之レヲ以ッテ宇宙觀ヲ創造シ國家觀ヲ樹立シタリ。

然レドモ、「あまのみなかぬしのおほみかみ」ヲ古事記ニ記載シタル天御中主神ナリト思ヘリシハ甚シキ誤謬ナリ。

カカル誤謬ハ神ト尊ト命ト大神ト大御神トヲ等シク「かみ」ニシテ、大小長短ノ差別カ或ハ単ニ敬称語ナリト妄想シタルガ為ニ起リタル過失ナリ。

「あまのみなかぬしのおほみかみ」ハ「あまてらすすめおほみかみ」トノタヘマツルトヒトシキカミコトタマニシテ、神トシテ人ノ認メ得ザル隠身デ、大平等トカ、無邊際トカ云フ意味デ、数学的ニハ零デ∞デ極大デ極小デ、物トシテハ質モ量モ無イ質量デ、神儀トシテハ天津金木ト呼ビ、行事ノ上デハ太遍遍ト称ヘテ神魔群團身タル八耳命ニテマシマスナリ。

「やつみみのみこと」ガ「あまのみなかぬしのおほみかみ」デ、「あまてらすすめおほみかみ」デアラセラルルコトハ、僅ニ「天照皇大神宮」ト教ヘラレタル大麻ニ依ッテ窺ヒマツル外ニハ高天原ノ神傳ガ有ルノミナリ。

「天照皇大神宮」ト教ヘラレタルハ「あまてらすすめおほみかみのみや」トノ意ナレバ、境地デ、住處デ、資料デ、國土デ、國常立デ、幸幸デ、止ラザルノ日デアルカラ日止ナラザルノ物ダトモ、神ナラザルノ神ダトモ、別天神ダトモ称ヘマツルノデ、之レヲ図示スルニハ○カ●カ□カ■カデ、一音ナラバ「ひ」カ「ふ」カ。之レヲ無人ノ人ト呼ビテ大正人道教主人ナリ。

之レヲ大正人道教主人ト呼ブハ、直日ナリトノ意ナレバ天祖デ、天讓日デ、國禅日デ、日ナラザルノ日デ、光ナラザルノ光デ、一ナラザルノ一デ、一切デアルトノ意ナリ。

一切ナリトハ無デ、無キ物デ、生滅デ、不生滅デ、人ノ身トシテハ知ルト云フノデハナク、悟證ヨリ外ハナイ。

此ク悟證ル方圖ヲ脩禊ト呼ブハ、太古以來各國各民族ガ傳ヘ來リ、習ヒ覚エタル神事ナリ。

其ノ祓禊ヲ行ズル注意トシテハ、

第一　人我ノ見ヲ捨ツルコト。
第二　神言靈ヲ観ルベキコト。
第三　天眞井ノ水ヲ仰ギマツルベキコト。
第四　一神ハ日神ニシテ両儀ナリト知ルベキコト。
第五　言ハ神ナリト悟證スベキコト。
第六　相モ神ナルコトヲ悟證ルベキコト。
第七　此クテ上下内外一團ノ光明體トシテノ神國ヲ案キ成スベキコト。

等ナリ。

以上　昭和十五年五月廿九日筆録

三峰の山の青葉を飜す、眞昼の風を荒川の、流るる水を塞止むる、夜半の氷を神の代の、神の治らして、人の身の、此くとこそ知れ、神ながら、かみのまにまにかみかかります。
ああひがてんじんゆうあいこう。

東アジアの古代文化 67号 天武天皇の時代「大和書房」

掲げた小論で論じたので、ここではその伝承の性格について補論的に検討してみたい。

まず第一に、「高天原」伝承とは、至高にして至上の他界を示す伝承であり、そこは天地初発時にもっとも浄らかな聖なる他界と考えられ、「天神」々の住む世界と考えられていたという点である。私はこの「高天原」という観念・言葉は「天皇」という観念・言葉の確立と連動して用いられるようになったと考えている。さらにそこには、「藤原」氏の政権掌握という政治的事態が背景にあったと考える。

第二に、この「高天原」は「天神」々の世界ではあるが、そこを「知す」ことになったのは、「三貴子」の第一子である「天照大御神」であるという点。つまり、「天照大御神」が「高天原」の統治・主宰神であり、最高・至貴の神と位置づけられているという点である。ここで、「天照大御神」が『古事記』の中で唯一一貫して「大御神」と表記されている点に注意しておきたい。

その他に、「伊邪那岐命」が三ヵ所で「伊邪那岐大御神」と用いられているほかに「大御神」の使用される例はない。「伊邪那岐命」は別の個所で「伊邪那岐大神」とも表記されていて、『古事記』中では唯一、「命」と「大神」と「大御神」の三つの称号をもっている。「大御神」と表記されている個所は、須佐之男命が泣きいさちっているのをとがめて「この国（葦原中国の筑紫の日向）」を追放する場面で、このち「伊邪那岐大御神」は「淡海の多賀」に鎮座すると語られる。とすると、伊邪那岐命が「大御神」と呼称されるのは須佐之男命を追放した威力と関係しているということである。

これに対して、「天照大御神」は『古事記』においては最初から最後まで一貫して「大御神」と表記されている。これはいったい何を意味するのであろうか。それは『古事記』中では「天照大御神」が最高・至貴の神であることを如実に示すものにほかならない。このように、「高天原」はこの最高・至貴の「天照大御神」によって統治される聖なる他界と位置づけられているのである。

第三に、「高天原」伝承において祭祀の起源が語られている点があげられる。乱暴をはたらいた須佐之男命の所業を怒って「天照大御神」が「天岩屋戸」に隠れたときに、「天児屋命（中臣・藤原氏の祖先神）」・「布刀玉命（忌部氏の祖先神）」「天宇受売命（猿女氏の祖先神）」たちが神事をとり行なった

神名	書名	命・尊	神	大神	大御神
アマテラス	記				二九
	紀			一八	
イザナギ	記	一三	一	二	二
	紀	三二	一		
イザナミ	記	一一	五		
	紀	一五			

右の三神の尊称表記の相違を示す。

一、アマテラスの場合は、『記』は「大御神」、『紀』は「大神」とはっきり分類され、異例はない。

二、イザナギの場合は『紀』は「命・尊」表記で、異例の「神」表記は一例のみだが、『記』は「命」表記以外に、「神」「大神」「大御神」表記があり、多様で一定していない。

三、イザナミは『紀』は「命・尊」表記のみなのに、『記』は「命」表記以外に「神」表記がある。

このような『記』『紀』の相違から言えるのは、『紀』は「アマテラス」を「大神」、それ以外の神を「尊」と書き、「神」表記はイザナギの一例以外は、「オホアナムチ」に二例あるのみで、ほとんどの神は「尊」表記である。この「尊」を『記』は「命」と書くが、イザナギは「命」以外に「神」

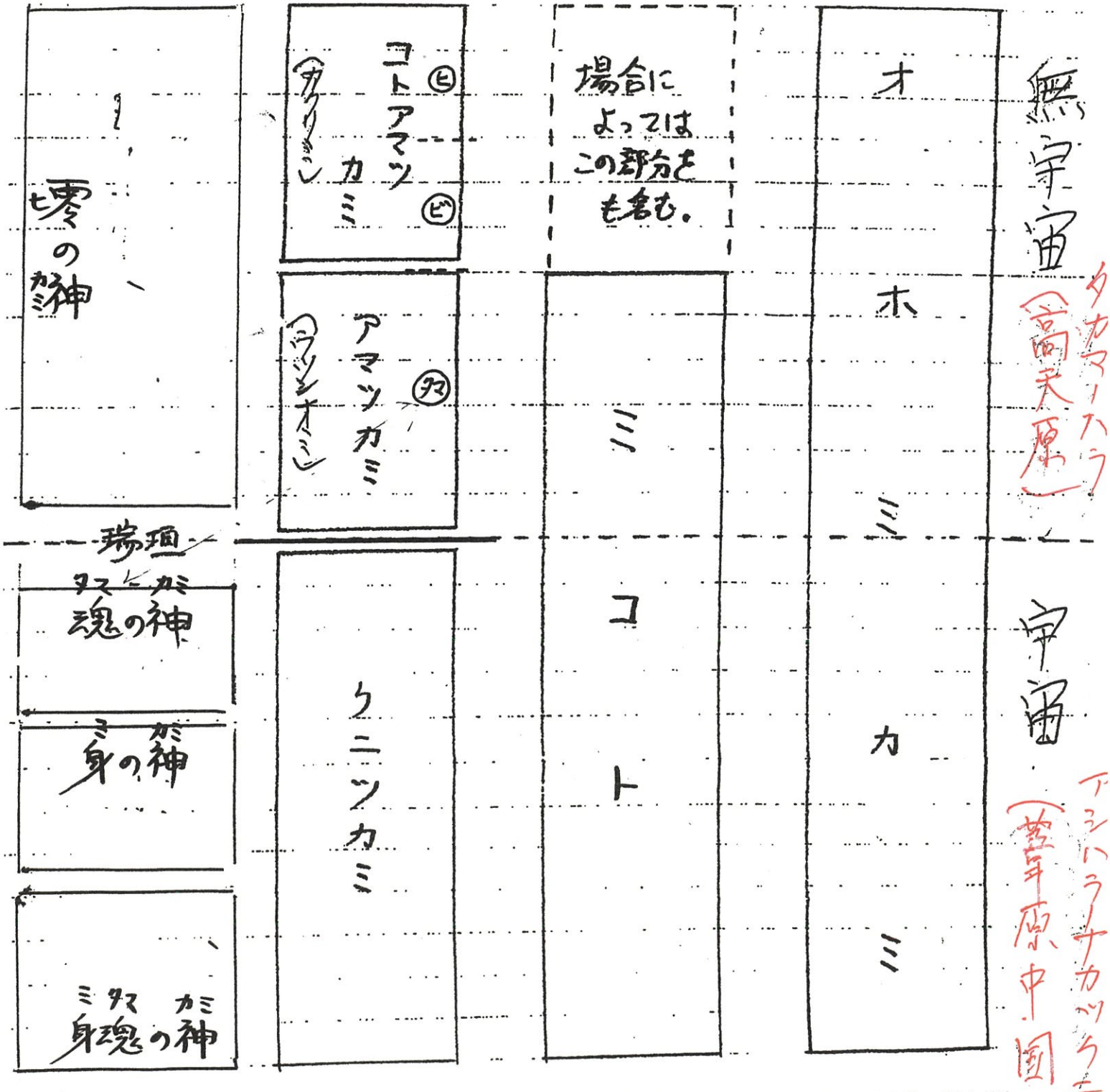
「大神」「大御神」とあり、イザナミにも「神」表記があり、統一していない。この事実は原『古事記』のイザナギ・イザナミは「命」表記であったのを、現存『古事記』が「神」「大神」「大御神」を改めたからである。

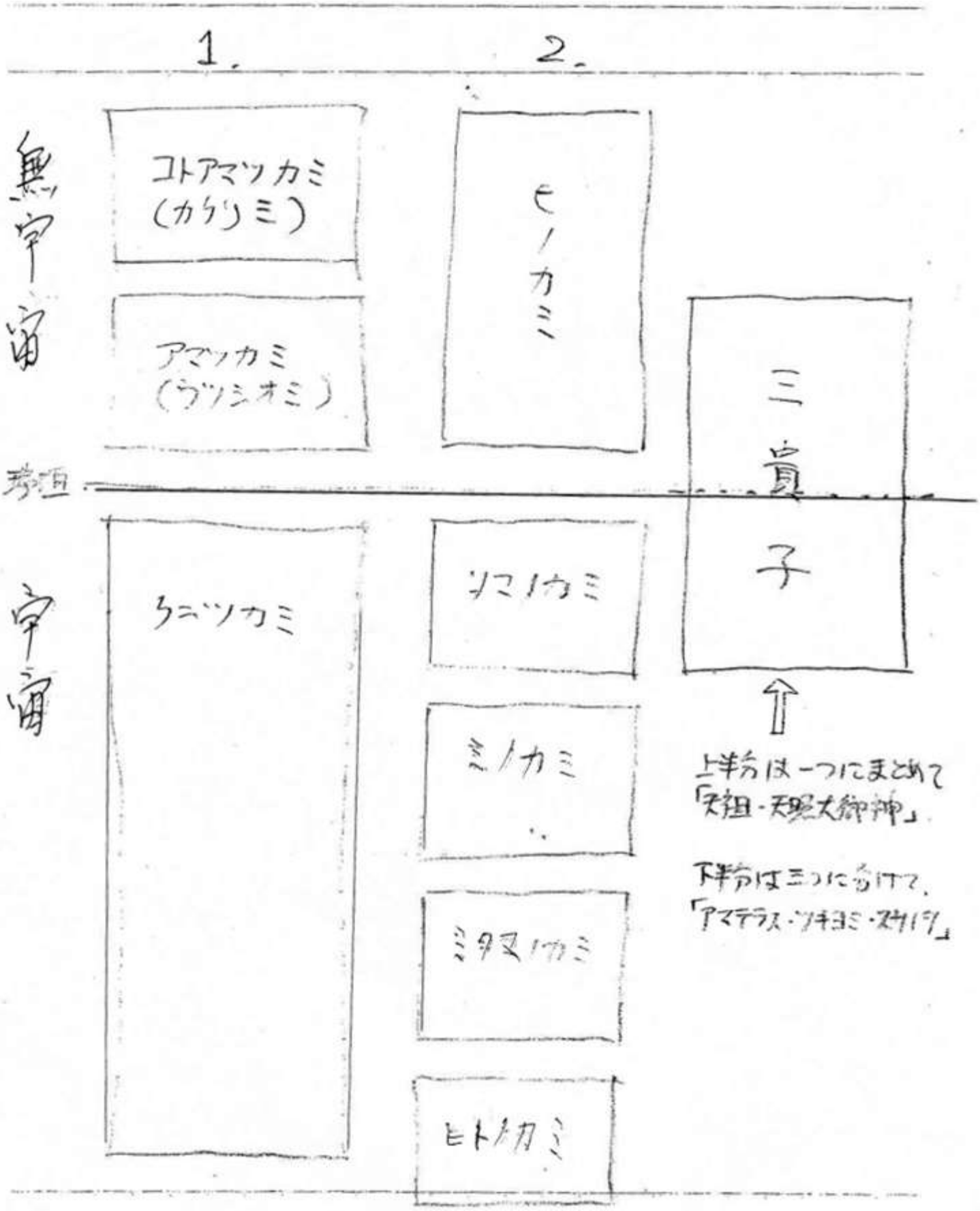
問題は「大御神」である。「アマテラス」はイザナギ・イザナミと違って、『記』は「大御神」、『紀』は「大神」に統一されており、不統一の「イザナギ」表記は、『記』のみが原『古事記』の「命」表記を不統一に、「神」「大神」「大御神」表記にし、「イザナミ」表記にも「神」表記がある。しかし「アマテラス」のみは、なぜかすべて「大御神」に統一している。

さらに問題なのは『記』のみが、なぜ「大御神」表記なのかである。「大御神」表記は平安時代初頭以降であり、奈良時代には「大神」表記のみであったから、原『古事記』の「天照大御神」を現存『古事記』に関与した人物（多人長）が、「大神」を「大御神」に改めたのである。（拙著『新版・古事記成立考』で詳論したが、『記』の中巻はすべて「天照大神」だから、上巻のみを「大御神」に改めている。しかしイザナギには「大神」と「大御神」が二例ずつあるのは、改字作業がアマテラスに集中したからである）。この事実（原『古事記』を現存『古事記』は改めている）からも、『記』の記事をストレートに受け入れて論じると、真実を見誤る。『記』『紀』が書く日神・皇祖神の天照大神という女神は、政治的意図によって作られた神である。

松前健は「天照大神」の祭祀は、宮廷では古くから行なわれた痕跡はないと書いており、溝口睦子（『アマテラスの誕生』（二〇〇九年・岩波新書）の天照大神は弥生時代から信仰されていたという見解をすでに否定している。そして天照大神の崇拝および神話は、伊勢のローカルな太陽神だったと書き、

概念図

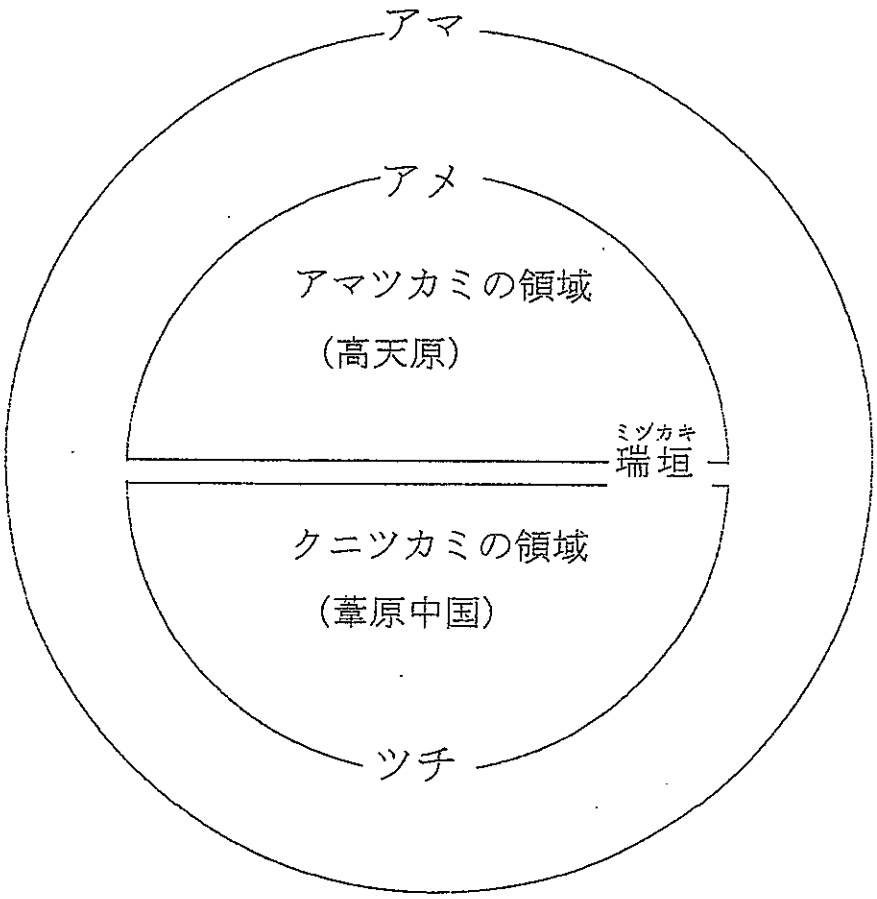

無宇宙
タカマノハラ
(高天原)
オホミカミ
場合によってはこの部分をも含む。
コトアマツカミ
(カミムスビ)
ヒ
ビ
零の神
ミコト
アマツカミ
(ウツシオミ)
タ
宇宙
アシハラノナカツクニ
(葦原中国)
瑞垣
タマシヒノカミ
魂の神
ミタマノカミ
身の神
クニツカミ
ミタマシヒノカミ
身魂の神


1.
2.
無宇宙
コトアマツカミ
(カクリミ)
アマツカミ
(ウツシオミ)
ヒノカミ
三貴子
天地
宇宙
クニツカミ
ツキノカミ
ミノカミ
ミタマノカミ
ヒトノカミ
上半分は一つにまとめて
「天祖・天照大御神」
下半分は三つに分けて、
「アマテラス・ツキヨミ・スサノヲ」

天地概略図　第二版（あくまでも概略）

コトアマツカミの領域（無宇宙）------（天石屋）
アマツカミの領域（無宇宙）----------　天
クニツカミの領域（宇宙）----------　地

全部あわせて「アマ」



○「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域（カミの領域、狭義の中津国）と幽界魔境（マガツビの領域、黄泉国）とに分かれている。

（第一版を参照）

霊神と火神と日神

① そもそも、「霊の神」とは、『十指両掌』によれば、「魂の神、身の神、身魂の神」の対義語であり、即ち、「無宇宙の側に属するカミ」の総称である。

これは、まず「コトアマツカミ」と「アマツカミ」に分類することができるのだが、その「コトアマツカミ」とは、幸196頁にもあるとおり、「牆壁も障礙も境涯も無い」という存在である。
（牆しょうは 垣の意味。牆壁は障壁と同義。）

互いを隔てる壁や境が全く無いと言うのだから、当然に、コトアマツカミ同士は渾然一体とした一塊の実体であり、少なくとも人間の能力では『ここからここまでで一柱。次に、ここからここまでで、もう一柱』などと切り分けて考えることのできない代物である。

故に、これを「隠身」と言い、また「独神」とも言う。なお、俗流の古事記解釈では、この「独神」という用語を「ひとりがみ」と読んで、「男女対偶ではない単独の神」の意味だとしているが、イザナギイザナミ以降のクニツカミの中にも、「男女対偶ではない単独の神」など幾らでもいるのだから、これは、未婚の人間を表現した「独身」という用語に引きづられた、間違った解釈である。

また、俗流の古事記解釈では、No.6.の「国之常立神」という神名に引きづられて、冒頭の五柱のみを別天神(コトアマツカミ)としているが、これもまた間違った解釈である。神名の接頭辞としての「天之(アメノ)、国之(クニノ)」は、神(カミ)や罪(ツミ)にかかる「天津(アマツ)、国津(クニツ)」とは、全く分類の基準が異なる。後者は、現代語に訳せば「無宇宙の、宇宙の」という「領域による分類」だが、前者は「経(タテ)としての、緯(ヨコ)としての」という「役割による分類」である。
(「天之(アメノ)、国之(クニノ)」で一対(いっつい)を成す神名は、イザナギイザナミ以降のクニツカミたちの中にも数多く見られる。)

② 次に、「アマツカミ」とは、言霊の幸の同196頁にあるとおり、「一定の境涯を築き、(宇宙の側に対して)神徳を顕わす」という存在である。即ち、所属としては無宇宙の側の実体だが、「宇宙との関係性」を前提として初めて成り立っている存在であり、その点が「宇宙の存在とは全く無関係に実在している」コトアマツカミとは異なっている。

また、アマツカミは実にしばしば、「時間・空間という枠組み」の内部に(つまり、宇宙の側に)入り込み、「一定の範疇」を築いてみずからクニツカミと成る。アマツカミとクニツカミの違いは決して「種族の違い」などではなく、単なる「位階(もしくは、活動領域)の違い」なのである。

③ また、「零神(ヒノカミ)」は、「火神(ヒノカミ)」と「日神(ヒノカミ)」とに分けて考えることもできる。

とは言っても、コトタマで大切なのは、あくまでも発音だけなので、漢字はすべて、ただの当て字に過ぎない。

しかしながら、「ヒ」という音の中には、一見して互いに矛盾しているのではないかと思えるほどの、実にさまざまなイメージがまとめて内包されているため，その中の「特定のイメージ」に焦点を当てたい時には、それに応じた「特定の漢字」を当て字として用い、互いに使い分けているのである。

そこで、まず「火(ひ)」のイメージだが、一般的には「燃える火」であり、「特定のカタチを持たない光」であり，薪(まき)を灰に変えるように「カタチあるモノを破壊する力」であると同時に、鍋料理のように「さまざまな素材を組み合わせて一個(ひとつ)のモノを作り出す力」でもある。「火神(かしん)」という用語も、それらのイメージのとおり、「そうした諸力を司る、カタチの無い零神(ヒノカミ)」を意味する用語である。

一方、「日(ひ)」のイメージは、一般的には「光り輝く太陽」であり、「特定のカタチにまとまった光」であり、「日神(にちしん)」という用語も、多田流では、「中心と外郭」という「特定のカタチ(内部構造)を具(そな)えた零神(ヒノカミ)」を意味する用語である。

零神(ヒノカミ)全体を火神(かしん)と日神(にちしん)の二つに分類するならば、その本来の定義から考えて、『コトアマツカミはすべて火神(かしん)であり、アマツカミ

は火神と日神に分かれる』と考えるべきだろう。

また、拙稿『命』にある、境地○、実体⊙、活用㋡の三区分に即して言えば、境地（天照皇大御神）と活用（天照坐皇大御神）は火神であり、実体（天照大御神）は日神である。

だが、これは決して「互いに独立した三個のモノが、本来はバラバラに存在している」などという意味ではない。

例えば、人間の肉体は「頭部、胸部、腹部、四肢」に分けて考えることができるが、肉体そのものは本来、「全体で一個」の存在であり、分けて考えるのは、ただ単に「理解のための便宜」であるに過ぎない。人間の能力では、自分の肉体を「一度に丸ごと理解」することが困難なので、そうした「真の理解」にいつか到達するための準備段階として、今は仮に分けて考えているに過ぎない。

それと同じように、火神も日神も実際には同じ霊神であり、天照大御神と天照皇大御神と天照坐皇大御神も、究極的には「同一の実体の、三つの側面」なのだ。

『三神即一身』は、それを端的に表現した言葉である。

なお、イザナギ・イザナミも、基本的には「活用の側面」を表現した神名であり、その意味において、火神の側に分類されるべき神名である。

（以上、おわり）

目次へ：「古事記」…